

新時代に対応した高等学校改革推進事業
【普通科改革支援事業】

実施報告書（第2年次）

聖ヨゼフ学園

日星高等学校

I 巻頭言

地方都市にある唯一の私立高校の教育改革
—普通科改革支援事業 2 年目を終えてみてきたもの—

校長 滋野 哲秀

本校は、海の京都 舞鶴市にある唯一の私立高校です。人口減少、過疎化が進行する地方都市において、私立高校としてできることは何かを考え、学校の役割を「地域のコミュニティとしての学校」ととらえ、学校づくりに挑戦してきました。

京都府舞鶴市は、令和 2 年までの 5 年間で人口が 83,990 人から 80,336 人へと減少し、特に、若年層の減少、高齢者層の増加により労働力不足や社会保障負担の増大など社会的・経済的な課題が顕著になっています。また、本校生徒の自宅通学圏には大学がほとんどなく、進学する生徒は親元を離れ下宿しなければなりません。こうした状況が U ターンする若者を減らす原因にもなっていると考えられます。このような状況下にある地方都市は多く存在します。

本校の教育プログラムの研究開発は、そうした地方都市における地方創生に向けた先進事例として全国に示すことができると考え探究を中心に据えた学校づくりに挑戦しています。

令和 6 年度、文部科学省より「普通科改革支援事業」及び「DX ハイスクール」の指定を受けた 2 年間の実践は、成果として見え始めてきました。生徒が地域を学びのフィールドとした探究活動の実践は、困難を乗り越え地域の方々に支えられて創造性豊かな成果を生み出しました。また、そうした実践により総合型選抜によって自分のキャリアとつながり大学進学を決めた生徒も出てきました。探究活動の発表の場である「高校生マイプロジェクトアワード」では 1 チームがアドバンスト大会まで進出し、もう 1 チームもアドバンストの手前の評価まで到達しました。全国 3 4 6 3 チーム中 1 0 9 チームにまで残ることができました。

本校の実践の特徴として大学生の伴走が大きな役割を果たしてくれました。龍谷大学の学生が活動する「龍大クエスト」という探究サポートチームは、対面での伴走の他に学生からの提案によるオンラインでの壁打ちミーティングなど教員とは違う若い世代の関わりを生み出してくれました。さらに福知山公立大学地域経営学部杉岡ゼミの学生、大阪大学の SUIT という探究サポートチーム、立命館大学産業社会学部メディアゼミの学生も探究の伴走に加わってくれました。こうした活動は高大連携の新しい姿を生み出しつつあります。高校生、大学生それぞれにどのような学びが生まれたのか、改めて検証していく予定です。

また、DX を含めた二つの研究指定がうまく重なり合い、探究活動を加速させることができました。令和 8 年度には本事業の目標である「地域未来科」1 期生が入学し本事業の最終年度がスタートします。こうした普通科改革支援事業に指導助言をいただく運営指導委員の皆様、コンソーシアム委員の皆様からは貴重な進言を多数いただき、研究開発が動いています。

本報告書は、日星高校の研究指定 2 年目の実践を記録したものです。同様の課題に挑戦されている高校の学校づくりの参考になれば幸いです。

後になりましたが、本事業にかかわっていただいた皆様に深く感謝を申し上げますとともに今後ともご指導をいただきますようお願い申し上げます。

目次

I 巻頭言	1
II 令和 7 年度 事業の概要と成果	3
III 学校を取り巻く背景	6
IV コーディネーター活動状況レポート	8
V 運営指導委員会の記録	10
VI コンソーシアム会議の記録	18
VII 探究における伴走支援と生成 AI 活用の必要性	27
VIII 2025 年度「舞 Way!」(総合的な探究の時間)実施報告	28
IX 2 年生「地域未来学 I」実施報告	49
X 高校魅力化アンケート結果の分析結果	66
XI 資料	72

Ⅱ 令和7年度 事業の概要と成果

【事業概要】

本校が所在する京都府舞鶴市は、人口減少及び少子高齢化の進行により若年層の地域外流出が続いており、地域社会の担い手不足が課題となっている。こうした状況の中、高等学校には進学・就職のための知識習得にとどまらず、生徒が地域や社会と主体的に関わりながら自らの生き方や進路を切り拓く力を育成する教育への転換が求められている。

本校ではこれらの課題に対応するため、本校の教育目標である「人と共に生き、人のために役立つ、心豊かなひと」の体現を目指し、「好きを深掘りし、人のために活かす学び」を教育活動の柱として普通科改革を推進している。本事業は、探究的な学びを単独の活動として導入するのではなく、教育課程、授業実践、教員組織、地域連携を一体的に再設計し、学校文化そのものの転換を図る取組として位置付けている。

その実現に向け、本校では従来の計画重視型である PDCA サイクルではなく、不確実性の高い現代社会に対応するため迅速な行動と振り返りを重視する OODA ループの考え方を基盤とし、本校生徒の実態に合わせて再構成した「行動から始まる探究サイクル（A→UODA：Action→Understanding→Orient→Decide→Act）」を教育活動の基盤としている。本サイクルは、まず行動（Action）を起点とし、体験の振り返りによる理解（Understanding）を経て状況判断（Orient）、意思決定（Decide）へとつなげ、再び行動へ循環させることで、生徒の主体的な学びと挑戦を促進するものである。

1年目においては、学校設定科目「地域未来学」の設計や地域・大学・企業等によるコンソーシアム体制の構築、生成 AI を活用した学習支援の試行など、改革の基盤整備を中心に進めた。特に、生徒の問いを起点とした探究プログラム「舞 Way」を核とし、Question Formulation Technique（QFT）を活用した問いづくりの実践を全校的に展開した。

2年目となる本年度は、学校設定科目「地域未来学Ⅰ」を中心とした探究学習の本格実装を進め、生徒が地域課題や社会的テーマに主体的に向き合う学習環境の充実を図った。また、生徒の探究活動を継続的に支援するため、生成 AI を活用した伴走型学習支援（通称「導きさん」）を導入するとともに、コーディネーターを中心として大学生メンターとのオンライン伴走支援体制を構築した。これにより、生徒は学校外の多様な視点から助言を受けながら試行錯誤を重ね、自らの問いを深化させることが可能となった。この取組は、教員のみでは対応が困難であった多様な探究テーマへの専門的助言体制を補完するものとなっている。

さらに、舞鶴市をはじめとする自治体、大学、地域企業との連携により、生徒が地域課題の解決や社会的実践へ挑戦する機会を拡充した。地域イベントへの参画や探究成果の社会発信、全国規模の探究発表への参加などを通して、生徒の社会参画意識や進路形成への主体性の向上が確認されている。

これらの取組は、生徒の変容のみならず教員の授業観や学校組織にも変化をもたらしている。知識伝達中心の授業から、生徒の問いに伴走するファシリテーション型の学びへの転換が進み、校内研修や外部連携を通じた協働的な実践が組織的に展開されつつある。

本報告書では、2年目における教育課程改革の実装状況、探究学習及び生成 AI 活用の実践、地域・大学等との連携、生徒成果及びアンケートによる成果検証を整理するとともに、人口減少社会における地方私立高等学校の新たな普通科モデルの可能性について報告する。あわせて、本校の取組を通して得られた知見や課題を広く共有し、地域とともに学び続ける高等学校の在り方を提示することで、人口減少社会における持続可能な普通科教育の実現に資することを旨とするものである。

【成果】

本事業 2 年目においては、教育課程改革の実装及び探究学習の深化を通して、生徒の学びの変容と学校組織の改革の双方において成果が確認された。

【生徒の主体的な学びの進展】

本年度より学校設定科目として実施した「地域未来学 I」においては、生徒の問いを起点とした探究活動を展開した結果、地域課題や社会的テーマに向き合う 9 つのプロジェクトが生徒主体で立ち上がった。これらの取組の中から 2 つのプロジェクトが全国高校生マイプロジェクトアワード京都サミットに出場し、両チームは地域 Summit 特別賞を受賞するなど、外部評価においても成果が確認された。さらに、Ito チームは上位大会であるアドバンスドプログラムへの出場を果たし、他校生徒や大学生サポーターとの対話を通して多様な視点に触れながら学びを深化させる機会を得た。

本年度は、探究活動に挑戦する生徒の姿が下級生のロールモデルとなることを目標の一つとして掲げており、マイプロジェクトアワードへの挑戦や成果発表の経験を通して、先輩の取組に刺激を受け新たな探究活動に挑戦しようとする動きが校内に広がるなど、その達成が確認された。

特に、探究発表会終了後にはマイプロジェクトアワードに出場した生徒を含む 4 チームが 1 年生との意見交流を実施し、探究の進め方や課題設定の工夫について対話を行った。これにより、下級生が具体的な挑戦のイメージを持つ契機となり、生徒同士が学び合いながら挑戦を促し合う文化の形成につながっている。これらの経験は、生徒が学びを学校内に留めることなく社会へ接続しようとする姿勢の醸成につながっている。

【学習支援体制の高度化】

生成 AI を活用した伴走型学習支援「導きさん」の導入に加え、コーディネータを中心として大学生メンターとのオンライン伴走支援体制を確立したことにより、生徒は学校外の多様な視点から継続的な助言を受けながら探究活動を進めることが可能となった。この取組は、教員のみでは対応が困難であった多様な探究テーマへの専門的助言体制を補完するとともに、生徒の試行錯誤や挑戦を支える新たな学習支援モデルとして機能している。

【教員の専門性向上及び学校組織の変容】

教員が NPO カタリバによる「探究スタートアップラボ」に参加し、外部伴走者との対話や他校教員との協働的な学びを通して、探究学習におけるカリキュラム設計及び評価設計に関する知見を深めた。これらの成果は次年度の教育課程編成及び評価方法の再設計へと反映される予定であり、生徒の問いを中心とした探究的な学びを学校全体で持続的に推進する基盤形成につながっている。また、本取組は探究学習を一部教員の実践に留めることなく、学校全体の教育課程及び

評価観の転換へと接続する契機となっている。

さらに、A→UODA サイクルを基盤とした「行動から始まる学び」の実践が広がる中で、教員の役割は知識伝達から学びの伴走へと変化しつつある。校内外の研修や外部機関との協働を通して実践共有が進み、協働的な取組が組織的に展開されつつあることは、持続可能な学校改革の基盤形成につながっている。

また、自治体、大学、地域企業等との連携により、地域を学びのフィールドとした教育活動が拡充されたことは、地方私立高等学校が地域社会と共に人材育成を担う新たな普通科モデルの可能性を示すものとなった。

Ⅲ 学校を取り巻く背景

【地域社会の変化と高等学校に求められる役割】

本校が所在する京都府舞鶴市は、日本海側の地方都市として人口減少及び少子高齢化の進行が顕著であり、若年層の都市部への流出が継続的な課題となっている。市の推計人口によれば、令和3年（2021年）1月時点で80,289人であった人口は、令和8年（2026年）1月には73,569人まで減少しており、わずか5年間で約6,700人の人口減少が生じている。出生数の減少に伴う中学校卒業生数の減少は地域の高等学校の存続環境にも大きな影響を与えており、学校にはこれまで以上に地域社会の中での存在意義が問われる状況となっている。

また、社会の急速なデジタル化や産業構造の変化により、従来型の知識習得中心の教育のみでは、生徒が将来の社会を主体的に生き抜く力を十分に育成することが難しくなっている。地域社会においては、進学や就職のための学力形成に加え、地域課題に関心をもち、多様な他者と協働しながら新たな価値を創出できる人材の育成が求められている。

こうした背景の中で、高等学校には地域社会と接続した学びを提供する拠点としての役割が期待されており、生徒が地域や社会と関わりながら学ぶ教育への転換が不可欠となっている。

【地方私立高等学校の課題と地域に開かれた学びの拠点への転換】

地方私立高等学校においては、生徒数の減少や進路の多様化に伴い、学校の特色化及び教育の質的転換が強く求められている。本校においても、生徒の進路選択が早期に固定化される傾向や、自ら問いを立て挑戦する経験の不足といった課題が見られた。

従来の授業では、与えられた課題に対して正解を求める学びが中心となり、生徒が主体的に行動しながら学びを深める経験は必ずしも十分ではなかった。その結果、自らの興味関心を社会との関係性の中で捉え直す機会が限られ、生徒の自己肯定感や進路選択の幅にも影響を与えていたと考えられる。

こうした状況を踏まえ、本校ではカトリック精神に基づく「人と共に生き、人のために役立つ、心豊かなひと」の育成という教育理念の実現に向け、学校の在り方そのものを見直す必要があった。人口減少や地域コミュニティの希薄化が進む中、学校が単に生徒を教育する場にとどまらず、小さな子どもから高齢者まで多様な世代が関わり合い、共に学び合う地域の拠点として機能することが求められている。

本校では、多世代が共に学び合う地域のハブとなる学校を目標として掲げ、地域社会と協働した教育活動を進めてきた。その具体的な取組として構想しているのが、新たな学びの柱となる「地域未来科」である。

地域未来科は、生徒が地域の歴史、文化、産業、人々の営みを理解することを出発点とし、地域課題の探究や社会との協働的な実践へと学びを発展させることを目的としている。地域を知ること単なる郷土理解にとどまるものではなく、多様な他者と出会い、自らの役割を見出す過程であり、本校の教育目標の体現へとつながるものである。

学校設定科目「地域未来学」はその基盤となる学びとして位置付けられており、生徒が地域社会の中で問いを見出し、行動しながら学びを深める実践を積み重ねている。本事業における普通科改革は、こうした地域との関係性を基盤として、生徒が社会の一員として主体的に生きる力を育成するとともに、多世代が学び合う地域のハブとしての学校の役割を具体化する教育モデルの

構築を目指すものである。

【本校の教育理念と普通科改革の位置付け】

本校はカトリック精神に基づき、「人と共に生き、人のために役立つ、心豊かなひと」の育成を教育目標として掲げている。この理念の実現には、生徒が他者との関わりの中で自己を理解し、社会の課題に向き合いながら行動する経験が不可欠である。

そこで本校では、「好きを深掘りし、人のために活かす学び」を教育活動の柱として位置付け、生徒一人ひとりの関心や問いを出発点とした探究的な学びの充実を図ることとした。

普通科改革支援事業は、この教育理念を具体的な教育課程及び授業実践として実装するための重要な契機として位置付けている。

学校設定科目「地域未来学」の導入や地域との協働的な学びの推進を通して、生徒が地域社会と接続しながら主体的に学ぶ環境整備を進めている。

IV コーディネーター活動状況レポート

(1) 4月～6月 探究活動の基盤形成

4月から6月にかけては、探究活動の基盤形成を目的とし、主に1年生の探究基礎カリキュラムの設計・実施支援を中心に活動を行った。

1年生に対しては、探究活動の土台となる関係性づくりを重視し、西舞鶴地域を舞台としたフィールドワーク「ウォークラリー in 西舞鶴」を企画・実施した。この活動では、地域の地理や文化を体感しながら生徒同士の交流を促進するとともに、地域に対する関心を高める機会を創出した。また、自己理解・他者理解を深めることを目的とした「自分プレゼン」の活動を実施し、生徒が自分の興味関心や価値観を言語化し、他者と共有する経験を通して、探究活動の出発点となる内面的な動機づけの形成を図った。

さらに、大学生の経験を聞く学習機会を設けることで、生徒が自らの進路や学びについて考える契機を提供した。大学生の実体験に触れることで、生徒は高校生活の中で主体的に学びに向き合う意義を具体的にイメージすることができた。

一方、2年生「地域未来学Ⅰ」においては、生徒のプロジェクト構想段階における伴走支援を行うとともに、地域の企業・団体・行政機関等との連携調整を進めた。生徒が地域課題や地域資源と関わりながら探究活動を進められるよう、学校と地域をつなぐコーディネートを行った。

この期間は、探究活動を継続的に展開するための基盤づくりの段階であり、関係性づくり、自己理解の促進、地域との接続など、探究活動の土台となる環境整備を中心に取り組んだ。

(2) 7月～9月 探究活動の展開とカリキュラム設計

7月から9月にかけては、生徒の探究活動の展開を支援するとともに、探究カリキュラムの全体設計に関する検討を進めた。

まず、「探究DAY」の企画・運営を支援し、生徒が日常の授業とは異なる環境の中で探究活動に集中して取り組む機会を創出した。また、1年生に対しては夏休みプロジェクトの設計を行い、生徒が主体的にテーマを設定し、小規模な探究活動を経験できるよう支援した。

9月には、マインドマップや問いづくりの活動を実施し、生徒が自らの関心や問題意識を整理しながら探究テーマを形成できるよう指導した。また、大学生によるオンライン伴走の開始に向けて準備を進め、生徒の探究活動を外部人材が支援する体制の構築を図った。

2年生「地域未来学Ⅰ」においては、A→UODAサイクル（Action→Understanding→Orient→Decide→Act）を意識した活動支援を行い、生徒が行動と振り返りを繰り返しながら探究を深めていく学習プロセスの定着を図った。また、地域団体や関係機関との連携を調整し、生徒が地域社会と関わりながら探究活動を展開できる環境づくりを行った。

さらに、探究スタートアップラボで得た知見を校内に共有するため、9月に校内ミーティングを実施した。このミーティングでは、「3年間で育成したい力」と「その力をどの学年・時期で育成するか」について整理を行い、探究カリキュラムの全体設計について検討を進めた。

この期間は、生徒の探究活動の実践を支援するとともに、学校全体として探究教育を体系的に推進するためのカリキュラム設計を進めた段階であった。

(3) 10月～12月 探究活動の深化と外部伴走体制の構築

10月から12月にかけては、大学生によるオンライン伴走を本格的に開始し、生徒の探究活動の深化を支援した。

大学生による伴走では、生徒が自らの探究テーマについて説明し、外部の視点からの助言や問いかけを受ける機会を設けた。これにより、生徒は自分の考えを客観的に見直しながら、探究内容をより深めていくことができた。

1年生に対しては、インタビュー調査の手法に関する指導を行い、調査活動の基礎的技能の育成を図った。また、実際に地域の関係者へインタビューを行う機会を調整し、生徒が社会と関わりながら情報収集を行う経験を積むことができるよう支援した。

さらに、2年生および3年生の中間発表や卒業論文発表の運営支援を行い、生徒がこれまでの活動を振り返りながら成果を発信する機会を整えた。発表の場では教員や生徒同士のフィードバックを取り入れ、生徒が自らの探究活動を再構築する契機となるよう支援を行った。

この期間は、外部人材による伴走体制の構築と、生徒の探究活動の質的向上を図る重要な段階であった。

(4) 1月～3月 成果発信と次年度に向けた改善

1月から3月にかけては、探究活動の成果発信と次年度に向けたカリキュラム改善を中心とした活動を行った。

探究スタートアップラボで得た知見を踏まえ、1月に重点的な校内ミーティングを実施し、「3年間で育成したい力」を具体的なカリキュラムへ落とし込む検討を行った。コーディネーターと探究部長を中心に、探究活動における評価とカリキュラムの接続について議論を進め、探究教育の体系化に向けた整理を行った。

また、2年生の優秀発表者と1年生との対話の機会を設け、学年間の学びの接続を図った。上級生の探究活動の成果や経験を共有することで、1年生の探究意欲を高めるとともに、探究活動のイメージを具体化する機会となった。

さらに、1・2年生の最終発表会の準備および運営支援を行い、生徒が1年間の探究活動の成果を発信する場を整備した。発表会では教員や生徒同士のフィードバックを取り入れ、学びを振り返る機会とするとともに、次年度に向けた探究カリキュラムの改善に活用した。

まとめ

本年度の取り組みにより、学年制による探究活動の運営基盤と外部伴走体制の整備が進むとともに、「3年間で育成する力」と評価・カリキュラムを接続する設計が具体化した。

コーディネーターは、地域と学校、外部人材と授業実践をつなぐ役割を担いながら、生徒の探究活動を支援するとともに、教員と協働しながら探究教育を学校全体で推進する体制づくりに寄与した。これにより、生徒が地域社会と関わりながら主体的に学ぶ探究活動の基盤が整備されつつある。

V 運営指導委員会の記録

【運営指導委員会】

所属	氏名
福知山公立大学地域経営学部	准教授 杉岡 秀紀（委員長）
福知山公立大学地域経営学部	准教授 大門 大朗
龍谷大学経営学部	准教授 眞鍋 邦大
立命館大学産業社会学部	教授 柏木 智子
舞鶴市市民環境部	部長 吉田 雅樹
株式会社ローカルフラッグ	代表 濱田 祐太

【実施体制】

運営指導委員会は、大学研究者、自治体職員、地域実践者など多様な専門性を持つ委員で構成し、地域未来科の設置準備および探究を基軸とした教育改革の進捗について助言・評価を行う体制としている。

会議には、学校法人関係者として校長・副校長・教頭等の管理職、探究主任、コーディネーターが参加し、教育課程、地域連携、組織運営の各観点を一体的に検討する形で運営している。

また、中間発表会および最終報告会に委員が参加し、生徒の探究活動に対する講評や助言を行うことで、教育活動の改善に資する評価体制を整えている。

【第1回運営指導委員会】

1. 日時 令和7年10月30日(木)13時~14時20分
2. 場所 日星高等学校 校長室
3. 運営指導委員数 6名
4. 出席委員数 4名

立命館大学産業社会学部教授 柏木智子 (Web参加)

福知山公立大学地域経営学部 准教授 杉岡秀紀

福知山公立大学地域経営学部 准教授 大門大朗 (Web参加)

舞鶴市市民環境部長 吉田雅樹

5. 学校側出席者 7名

学校法人聖ヨゼフ学園理事長 小林圭児

同 法人事務局次長 小林圭太

日星高等学校校長 滋野哲秀

同 副校長 松崎真一

同 教頭 青葉謙一

同 教頭 吉岡達也

同 探究主任 小谷英里

同 コーディネーター 能勢ゆき

第1回運営指導委員会では、普通科改革支援事業の進捗状況と、翌年度開設予定の「地域未来科」に向けた構想について報告と協議が行われた。会全体を通して確認されたのは、日星高校の探究がまだ立ち上げ期にありながらも、すでに地域や大学、企業とつながる具体的な実践が生まれ始めていること、そして今後はその探究をどのような理念で深め、学校全体の学びへ接続していくかが重要な論点になっているという点である。

まず学校側から、2026年度に「地域未来科」を新学科として設置すること、そのプロトタイプとして現在の2年生が選択科目「地域未来学Ⅰ」を履修していることが報告された。地域未来学Ⅰを選択した生徒は、既存のMy Way!と合わせて週4単位の探究に取り組んでおり、3年次には地域未来学Ⅱを含めて週5単位規模の探究へ発展する構想が示された。内容としては、地域に根差したプロジェクト型・リサーチ型の探究を、外部支援者や教員の伴走のもとで進めていく形が想定されていた。

探究の方法論としては、OODAループを採用し、特に「まずやってみる」という行動を起点にしている点が特徴として強調された。計画を立てて終わるのではなく、まず動き、その結果を振り返り、状況を見て次の行動を決めるという循環を回していくことで、生徒の学びを前進させようとしている。この点については、委員からも、学校現場ではルールを引きすぎてしまいがちな中で、失敗も含めて学びに変えるこの設計は非常に重要であり、本校の大きな特色になり得るといった評価があった。

実践例としては、舞鶴の企業と連携した帽子づくり、参加者ゼロという失敗から再構築を図っているビンゴ大会、高齢者の笑顔や居場所づくりを目指すプロジェクト、図書館活性化を目指す

舞鶴版 ito、万願寺甘とうを使ったスイーツ開発、歌を通じた多世代交流などが紹介された。いずれもまだ試行錯誤の段階ではあるが、協議の中では、こうした活動の多くに大学生、企業、地域施設など何らかの「外部パートナー」が関わっていることが重要な特徴として捉えられていた。自分たちだけで完結する探究ではなく、他者との関係の中で進んでいくことを、日星高校の探究の特色として明確に打ち出せるのではないかという方向で議論がなされた。

また、探究の伴走体制として、大学生チームが継続的に入っていることも大きな特徴として共有された。対面だけでなく、オンラインでも各チームに伴走し、生徒の壁打ち相手となっていることが紹介された。加えて、壁打ち相手の不足を補うものとして、ChatGPT の My GPT 機能を用いた「My Way!地域未来学導きさん」も導入されており、生徒が一定程度それを活用していることも説明された。地域的に大学生との接点を持ちにくい環境の中で、大学生や AI を活用して伴走者を確保していることは、本校ならではの工夫として受け止められていた。

一方で、協議の中で最も大きな論点となったのは、「探究のゴールをどこに置くのか」という点であった。学校側からは、現状では行動する生徒や仲間と協働する生徒は増えているものの、まだ「好き」や「自分の欲求」を満たす方向に重心があるため、それを社会貢献や地域課題、地域のウェルビーイングにつなげていきたいという課題認識が示された。また、カトリック校として、自分の好きだけでなく、それが他者の幸せにつながるような学校づくりを探究の中心に置きたいという考えも述べられた。

これに対しては、「好き」と「他者の幸せ」を対立的に捉えすぎる必要はないのではないか、という意見が出された。好きを突き詰めること自体にも十分な価値があり、それが結果として他者の喜びや社会とのつながりに発展することもあるため、「好き」を弱めるような表現にする必要はないのではないか、という見方である。また、課題解決や社会貢献を初めから強く求めすぎるとは、大人の側の期待を先に置きすぎている可能性があるという問題提起もなされた。

この点について、探究は本来、好きなことを突き詰める営みそのものであり、その結果として誰かが喜んだり、仲間が増えたりし、最終的に幸せにつながるのであって、最初から「地域貢献しなければならない」と構えるのは探究本来のあり方とは少し異なるのではないか、という意見も出された。

一方で、学校側からは、教員が問題にしているのは「好き」そのものではなく、高校生に多い、移ろいやすく表面的な好きであり、少ししんどくなるとすぐ離れてしまうような関心ではなく、社会の中でも持ちこたえられるぐらい深まった「好き」に育てていきたいのだ、という補足があった。

協議全体としては、「好き」と「社会性」を二者択一で考えるのではなく、好きから始まり、それが深まることで結果として他者や社会につながっていく構造をどう育てるかが中核的な論点として共有された。

もう一つの大きな論点は、プロジェクト型探究と研究型探究のバランスであった。会議では、報告された実践はプロジェクト型が中心に見えるが、研究型探究はどのように進めていくのかという問いが出された。学校側からは、現状はかなりプロジェクト型に偏っており、研究志向のテーマも出始めているものの、どう支えればよいか悩んでいると率直な説明があった。

これに対して、他校では数学、情報、生物、物理などで研究型探究がかなり進んでいることが紹介され、生徒に研究テーマのイメージを持たせるためにも、他校の発表例や研究タイトルを意図的に見せることが有効ではないかという助言があった。学校側も、教科横断的な学びや理系教員・理系学生との接続を強めながら、今後は研究型のテーマも育てていきたいという方向性を示した。

また、行動を先に置く探究の姿勢を高く評価しつつも、「小さな失敗をどうデザインするか」という問いも出された。大失敗は避けつつも、生徒に必要な試行錯誤をどう経験させるのか。また、高校生の「やりたいこと」と地域課題や社会的課題をどのように結びつけているのか、さらに地域未来科との接続をどう考えているのかが問われた。

これに対して学校側は、そこはまだ手探りの段階であり、OODA ループを回す中で少しずつつながっていくことを期待していること、また高校生は落ち込みやすく揺れやすいため、そこを支えるフォローアップこそが教員の役割であり、ティーチングよりもファシリテーションや伴走が重要になると応じた。

学校全体への波及という観点でも重要な報告があった。1年生総合コースで「質問づくり」から入る授業を導入したところ、不登校傾向の生徒の改善が顕著に見られていること、さらに探究の中間発表や最終発表を経験した生徒は、模擬面接で非常によく話せるようになっているという実感が語られた。加えて、「データサーベイフィードバック」を活用し、数値の経年変化を追いながら、生徒にどのような影響が出ているかを月1回程度の研修会の中で検証していることも紹介された。つまり、探究は一部の特色ある活動にとどまるものではなく、教科の授業改善や進路形成、生徒理解にも接続しつつあることが共有された。

学校側が掲げた「舞鶴市の学びのプラットフォーム」という目標にも強い共感が示された。ただし、それは単に学校が公開講座やイベントを開くことではなく、生徒が地域に飛び出し、問いを立て、地域側もその問いに揺さぶられながら学び返していくような、双方向的で立体的な学びの場であるべきだと整理された。特に、「学校が作るプラットフォーム」ではなく、「生徒が作るプラットフォーム」という捉え方が高校らしさにつながるのではないかという視点は、本校の今後の探究や地域連携を考える上で、非常に示唆的な意見として共有された。

第1回運営指導委員会は、地域未来科の立ち上げと現時点での探究実践を報告する場であると同時に、日星高校の探究をどのような思想で育てていくのかを問い直す場であった。行動先行型のOODA ループ、外部パートナーとの協働、大学生やAIを活用した伴走体制、地域の学びのプラットフォームを目指す構想など、方向性そのものは高く評価された。一方で、好きと社会性の関係、研究型探究の育成、失敗のデザイン、教科との接続、学校全体への浸透など、今後さらに詰めるべき論点も多く示された。第1回は、何を目指して探究を進めるのか、その土台となる考え方を学校側と委員とで擦り合わせた回であったと言える。

【第2回運営指導委員会】

1. 日時 令和8年3月11日(水) 10時～12時
2. 場所 日星高等学校 校長室
3. 運営指導委員数 6名
4. 出席委員数 3名

立命館大学産業社会学部教授 柏木智子 (Web参加)

福知山公立大学地域経営学部 准教授 杉岡秀紀

龍谷大学経営学部 准教授 眞鍋 邦大 (Web参加)

5. 学校側出席者 7名

学校法人聖ヨゼフ学園理事長 小林圭児

同 法人事務局次長 小林圭太

日星高等学校校長 滋野哲秀

同 副校長 松崎真一

同 教頭 青葉謙一

同 教頭 吉岡達也

同 探究主任 小谷英里

同 コーディネーター 能勢ゆき

第2回運営指導委員会では、普通科改革支援事業およびDXハイスクール事業の2年目の取組報告と、3年目に向けた構想について共有がなされた。学校側からは、今年度の探究活動の成果と課題を報告した上で、委員から今後の方向性について率直な助言を得たいという趣旨が示された。会全体を通して確認されたのは、日星高校の探究が単なる「活動報告」の段階を越え、学校改革、地域との関係づくり、生徒の進路形成にまでつながり始めているという点である。一方で、その広がりに対して、探究の意味づけ、教科学習との接続、主体性の捉え方、成果の検証方法など、次の段階に進むための課題も明確に議論された。

まず学校側から、今年度の成果として、1年目は1年生から3年生までを同時に立ち上げる難しさがあったが、2年目となる今年度は、特に1年次から積み上げてきた2年生に成長が見られたことが報告された。また、DXハイスクール事業を活用し、図書室とAV教室を再編して、新たな探究空間「DXスクエア 未来のアトリエ」を整備したことも大きな成果として共有された。この空間は、机や椅子を自由に動かして対話的な活動やグループワークができる場として機能しており、大学生メンターと生徒が車座になって探究を振り返る場にもなっている。探究を支える物理的環境が整ったことで、学校の学びの風景そのものが変わり始めていることが示された。

さらに、2026年度から本格始動する「地域未来科」についても報告があった。今年4月入学生が第1期生となる予定であり、入試時の小論文等からも、舞鶴をベースに学びたい、地域未来科を意識して入学したいという生徒が一定数現れていることが紹介された。これは、学校の改革の方向性が受験生や中学生にも伝わり始めていることを示すものとして受け止められた。

実践例としては、いくつかのプロジェクトが報告された。

「地域の魅力を込めた帽子づくり」では、野球部の生徒たちが、自分たちの修学旅行用の帽子づくりをきっかけに、舞鶴らしさを込めた商品開発へと発展させた。地元企業である三葉商事と連携し、素材やデザイン、価格設定まで含めて検討し、修学旅行までに 30 個超を販売するところまで至った。一方で、生徒自身が、魅力の伝え方やマーケティング、使う側の視点が十分ではなかったことを振り返っており、単なる制作体験に終わらず、商品化や流通の現実まで含めた学びとなっていた。

「ビンゴ大会プロジェクト」では、当初は校内で有料ビンゴ大会を企画したものの参加者ゼロに終わった。しかし、その失敗を受けて、地域イベントやクリスマスイルミネーションと連動する形に組み替え、教員、大学生、地域企業の助言を受けながら、無料開催、景品調達、広報の再設計を進めた。結果として多くの参加者を集める企画となり、生徒たちは、失敗から学び、改善し、他者を巻き込みながら再挑戦する探究の循環を経験した。

「歌を通して地域の人とつながろうプロジェクト」では、合唱が好きな生徒と保育士志望の生徒が協働し、高齢者や子どもたちとの交流を目指した。当初は企画の目的が曖昧で、公民館長から厳しい指摘を受けたが、その後、生徒たちは「歌を披露すること」そのものではなく、「多世代交流を生むこと」が自分たちの本来の目的であると気づき、企画を組み直していった。活動を通して、移動手段の問題、子どもの特性への配慮、相手の立場に立った場づくりなどを学んでいったことが共有された。

「舞鶴版 ito プロジェクト」では、図書館イベントに若者が来ないという問題意識から、カードゲーム「ito」を舞鶴版にアレンジし、多世代交流を生む地域密着型の対話ゲームとして発展させていった。イベント自体の満足度は高かった一方、中学生の参加が伸びなかったことが課題として残った。特に中学生向けチラシの配布が「校長→担任→中学生」という伝達になったため、生徒たち自身の思いや熱量が十分に伝わらなかったことが振り返られ、そこから「熱量を直接届けること」の大切さを学んだと報告された。また、この活動は新図書館構想への提案にもつながっており、生徒が図書館課長との面談やワークショップに参加しながら、交流拠点としての図書館の在り方を提案している点が紹介された。

海ごみアートの活動を続けてきた 3 年生が、京都女子大学の総合型選抜で合格したことも共有された。探究が単なる体験活動ではなく、自己理解や進路形成に結びついていることを示す事例として位置づけられた。



教員側・学校運営側の取組としては、教員自身も「探究スタートアップラボ」などの外部研修に参加し、探究を支えるチームづくりや来年度カリキュラムの構想を進めていることが報告された。また、龍谷大学生を中心とした大学生の伴走支援が非常に効果的であり、対面・オンライン

の両面で生徒の壁打ち相手となり、生徒の行動やモチベーションに大きく影響していることも共有された。

教員数が限られる中で、生成 AI を補助的な壁打ち相手として導入していることも説明され、今後は 1 年次で関係性づくり、自己理解、ミニ探究を行い、2 年次で本格探究、3 年次で卒業探究報告会や論文化につなげる流れが示された。さらに、ルーブリックと面談を用いて、生徒の自己評価と教員評価をすり合わせながら成長を見取る仕組みも整えようとしていることが説明された。

一方で、アンケート結果からは明確な課題も見えていた。社会参加意識やウェルビーイング、人のために役立ちたいという意識は上昇しているものの、「授業で質問する」「自分から聞きに行く」といった学習的主体性は低下していた。この点について学校側は、AI 活用によって困る経験や試行錯誤する時間が奪われていないか、これまで正解を与えられる学習に慣れてきた生徒が、問いを立てる学びへ移行する際に不安を抱いていないか、といった仮説を挙げていた。

つまり、探究活動そのものは前進している一方で、それが教科での学びや日常の学習姿勢にまで十分には波及していない可能性があり、今後は教科の授業の中にどのように問いづくりや探究的学びを位置づけるかが大きな課題として共有された。

委員からは、全体として高い評価が示された。失敗から学び、地域や大学生、大人を巻き込みながら探究を回していくスタイルは、日星高校ならではの強みであり、他校との差別化にもなっているという意見があった。

また、「主体性」とは、最初から生徒がすべてを自分で決めることだけではなく、探究の過程で考えが深まり、のめり込み、自分ごと化していく中で育つものではないかという重要な指摘もあった。そのため、教員がある程度テーマや入口を与えることも否定されるべきではなく、「全部ゼロから生徒が決めなければならない」と硬直的に考え過ぎると、かえって探究の可能性を狭めるのではないかという助言があった。

また、アンケート調査の扱いについても委員から示唆があった。数値上の上昇・低下をそのまま受け取るのではなく、質問項目そのものの意味や設計、何をもって「主体性」と見ているのかを慎重に検討する必要があるという意見である。すでに整理された概念の上下だけで判断するのではなく、下位項目そのものを見て、そこからどのような力が育っているのかを読み解く視点が必要だという問題提起であった。これは、今後のカリキュラム改善を考える上でも重要な論点であり、学校としても結果の見方そのものを再検討する必要があることが共有された。

さらに、かなり本質的な論点として、「探究や研究は本来、大学以降に本格的にやるものではないか。高校段階でそこまで行う必要があるのか」という問いも出された。

この問いに対しては、大学の学びが本質的に探究的であることは確かだが、高校で探究を経験することには別の意義があるのではないかという形で議論が深められた。具体的には、高校段階で探究に取り組むことで、学ぶことへの抵抗感を減らし、自分の興味や違和感に気づき、学び続ける感覚を育て、進路のミスマッチを減らすことにつながるのではないかという意見が共有された。特に、日星高校のように進学だけでなく就職も含めて多様な進路を持つ学校では、探究は大学進学のための訓練ではなく、自分の生き方や働き方を考える土台として機能し得るという認識が示された。人生 100 年時代において、受験や就職で学びが終わるのではなく、その後も学び続けることが求められる以上、高校で探究を行う意味は、研究手法を教えること以上に、「学び続け

る姿勢」を育てることにあるのではないかという整理がなされた。

今回の委員会では、日星高校の探究は、すでに「活動に参加する生徒」や「自ら活動する生徒」を生み出しつつある段階に入っていることが確認された。しかし、目指すべき到達点はそこではない。今後は、他者との対話や協働、失敗と改善の過程を通して、学びを自分ごととして捉え、自ら問いを立て、学び続ける生徒を育成していくことが求められる。

人生 100 年時代においては、学校卒業後も学び続けながら社会の変化に向き合い、自らの生き方や進路を更新していく力が不可欠である。今回の委員会は、日星高校の探究がそうした力の育成に向かう確かな可能性を有していることを確認するとともに、その実践を学校文化、教員文化、進路形成へと接続し、より持続的で本質的な学びへ高めていく必要があることを共有する場となった。

VI コンソーシアム会議の記録

【コンソーシアム委員】

所属	氏名
NPO 法人みんなあの居場所・彦一郎	水嶋 純作（委員長）
舞鶴商工会議所	和田 員之
舞鶴市教育委員会	前田 暁代
舞鶴市役所 政策推進部 企画政策課	小谷 操
一般社団法人 KOKIN	原田 翔太
福知山公立大学	杉岡 秀紀
京都府立大学	窪田 好男
舞鶴市観光協会	植本 浩明
KATA Lab	高田 智哉
舞鶴 YMCA 国際福祉専門学校	阿部 和博
株式会社福岡ゼミナール	福岡 正典

【重点テーマ】

本年度のコンソーシアムは、次の3点を重点テーマとして設定する。

- ①「地域未来学Ⅰ」をロールモデルとし、学校全体の探究活動の質向上につなげること
- ②探究活動の成果をキャリア形成や進路選択へ接続すること
- ③地域への当事者性を育み、将来的な地域との関わりにつなげること

【実施体制】

日星高等学校では、地域と協働した教育活動を推進するため、「日星高校魅力化構想会議（コンソーシアム）」を設置している。本コンソーシアムは、大学、行政、産業界、地域団体、教育機関など多様なステークホルダーによって構成されており、それぞれの専門性やネットワークを活かしながら、生徒の探究活動の充実および新学科の教育活動を支援する体制を整えている。学校単独では実現が難しい地域連携型学習の基盤を形成し、地域社会とともに学びを創る仕組みとして機能している。

【第1回コンソーシアム会議会議】

1. 日時 令和7年8月1日(金) 15時~17時
2. 場所 日星高等学校 AV教室
3. コンソーシアム委員数 11名
4. 出席委員数 9名

株式会社福岡ゼミナール代表 福岡正典(Web)
舞鶴商工会議所青年部 和田員之
舞鶴市教育委員会学校教育課主任 前田暁代
舞鶴市政策推進部企画政策課企画調整係長 小谷操
一般社団法人 KOKIN 原田翔太
京都府立大学公共政策学部教授 窪田好男
舞鶴YMC A国際福祉専門学校代表 阿部和博
KATALa b代表 高田智哉
みんなあの居場所彦一郎 代表 水嶋純作

5. 学校側出席者 7名

学校法人聖ヨゼフ学園理事長 小林圭児
同 法人事務局次長 小林圭太

日星高等学校校長 滋野哲秀
同 教頭 青葉謙一
同 教頭 吉岡達也
同 探究主任 小谷英里
同 コーディネーター 能勢ゆき

第1回コンソーシアム会議では、地域未来学および今後開設を予定している地域未来科の趣旨を共有したうえで、地域や外部機関とどのように連携しながら、生徒の探究活動を支え、広げていくかについて意見交換が行われた。会議の冒頭では、コンソーシアムの委員に対して、テーマに応じた専門的支援や助言、フィールドワーク先の提供、広報・発信の支援、発表会でのフィードバックなどをお願いしたいという学校側の意図が示され、それを受けて各委員から、それぞれの立場から見た期待や提案が出された。全体を通して共有されたのは、地域未来学が単なる校内の新しい授業ではなく、人口減少時代の地方都市において、高校教育のあり方そのものを問い直し、地域とともに新しい学びをつくっていく試みとして大きな可能性を持っているという認識であった。



まず、小中学校との接続という観点からは、中学校までの総合学習や探究的な学びを高校でさらに発展させ、高度化していくことへの期待が示された。中学校段階で育てた土台を、高校でより深い探究やプレゼンテーション、表現の力へとつなげていくことができれば、生徒にとっても楽しく、将来社会に出たときに役立つ学びになるのではないかという意見があった。

また、小中高の交流や、高校生から中学生が学ぶような機会があれば、地域全体で学びが循環していく可能性もあるという見方が共有された。これは、地域未来学を高校単独の取組として閉じず、地域の学びの連続性の中で位置付けていく必要性を示す意見であった。

地域側の立場からは、学校だけで考えていても生徒の発想が広がりにくい場面があるため、何かが具体的に決まってから相談するのではなく、もっと前段階から外部の人材を「壁打ち相手」として気軽に活用してほしいという提案があった。

地域おこし協力隊や地域の拠点、外部団体などが、生徒のアイデアを整理したり、行き詰まったときに刺激を与えたりする役割を果たせるのではないかという意見である。

学校側からも、水曜日の地域未来学の時間帯にふらっと立ち寄ってもらい、「何をしているのか」と声をかけてもらうだけでも、生徒にとっては大きな刺激になるという話があり、実際にそうした偶発的な出会いから新しいプロジェクトが生まれてきたことも共有された。

探究は計画通りに進むものではなく、どこでどのような化学反応が起こるか分からないからこそ、大人が学校の中に自然に出入りし、生徒と関わるということが重要であるという認識が示された。

行政の立場からは、舞鶴市が直面している人口減少や地域づくりの課題と、地域未来学の方向性が非常に重なっていることが示された。市としては、今後15年で人口が大きく減少する見通しの中で、これから現役世代となる高校生に舞鶴のことを知ってもらい、考えてもらうことが不可欠であり、その意味で地域未来学は極めて重要な取組であるという見方が示された。

また、市役所には各課が対応する「まちづくり出前講座」が多数用意されており、気軽に電話してもらえれば各課につなぐことができるという具体的な支援の提案もあった。学校側から市役所へのアクセスを高いハードルに感じるのではなく、必要なテーマがあればどんどん相談してほしいという姿勢が示されたことは、今後の探究活動を支える実務的な基盤として重要な示唆であった。

地域を舞台にしながらも、舞鶴だけに閉じない視点の必要性も複数の委員から提起された。舞鶴YMCAからは、専修学校や専門学校との連携、福祉分野や観光分野とのコラボレーション、障害者スポーツであるボッチャの活用、韓国の大学との交流など、多様な接点が紹介され、舞鶴という地域を入口としながらも、国内外へと視野を広げていく探究のあり方が提案された。地域の課題を考えることは、必ずしも地域に閉じこもることではなく、むしろ外の世界との接点を持ちながら舞鶴を相対化し、その魅力や可能性を再発見していくことにもつながるのではないかという考え方である。

観光や福祉、国際交流などの分野では、高校生が関わる余地のある具体的な場面も示されており、今後の連携の方向性として大きな可能性が感じられた。

経済界の立場からは、人口減少時代において地域の持続的な繁栄を考えるためには、「自分がやりたいこと」だけでなく、「なぜそれをやる必要があるのか」「それがどのような地域課題や社会的価値とつながっているのか」を明確にすることが必要ではないかという意見が示された。

生徒の思いや関心を出発点とすること自体は重要であるが、それが思いづくりで終わってしまっただけでは意味がなく、どのような課題に対して、どのようなゴールを目指して取り組んでいるのかを設計する必要があるという指摘である。

たとえばSDGsのような目標設定を参照しながら、自分たちの探究が何に向かっているのかを言語化することで、学びの意味や行動の質が変わってくるのではないかという提案がなされた。これは、探究を感覚的な活動に終わらせず、社会的な文脈と結びつけていくうえで重要な視点であった。

学校法人としての理念との接続についても意見があった。自分さえ良ければよいという発想ではなく、「他者のために」「喜んで支える」という価値観は、日星高校がもともと大切にしている教育理念とも重なっており、探究活動においてもその視点を中心に据えるべきではないかという確認がなされた。

学校側からも、「何のためにやるのか」という問いこそが、日星高校の探究の核になるのではないかという受け止めが示されており、生徒の「好き」を出発点にしながらも、それを他者への貢献や地域への関わりへとつなげていく方向性が、学校の教育方針と一致していることが改めて確認された。

進学や学力の観点からは、これからの時代には単に勉強をさせるだけでは不十分であり、生徒が自分の将来像やキャリアを具体的に思い描き、そのために学ぶ意味を自覚することが重要であるという意見が出された。学力低下が進む中で、目標のないまま勉強させられている状態では、自ら学ぶ力は育ちにくい。

今後は、探究活動を通して「自分は何をしたいのか」「どういう経験を積みたいのか」「将来どのような生き方をしたいのか」を考える機会を持つことがますます重要になるという指摘である。

また、総合型選抜や推薦入試が拡大する中で、高校時代に何をしてきたか、自分の経験をどう語るかが問われるようになっており、その意味でも探究活動やプレゼンテーション能力の育成は現実的な進路形成にも直結するという見方が示された。

さらに、生徒募集の観点からは、中学校や小学校の教員に学校の考え方や取組を理解してもらい、共感を得ていくことが重要であるという意見もあり、学校外の教育関係者との関係づくりの必要性が指摘された。

教員と地域の連携体制の重要性についても議論があった。探究が進んでいる学校を視察すると、最初の段階では教員の力量や動き方が非常に大きく影響しており、生徒のやる気や活動の質は教員の伴走のあり方に左右される面が大きいという実感が共有された。そのため、日星高校の教員自身の体制づくりと、教員が地域の人々とつながりながら生徒を支える仕組みを整えることが重要ではないかという意見があった。

また、将来的には日星高校だけで完結するのではなく、西舞鶴高校、東舞鶴高校、舞鶴高専など、舞鶴市内の高校同士が連携した探究へと発展していくことが理想ではないかという提案もあった。実際に4校の生徒が交わるイベントでは、自分の学校だけでは得られない学びやつながりが生まれていたことが共有され、高校間連携の可能性が示された。

委員からの評価としては、地域未来学や地域未来科の構想そのものに対して、大きな期待と肯定的な見方が示された。地域人口の減少や地方の厳しい現実を考えると、従来型の高校教育のままでは立ち行かなくなるのではないかという危機感の中で、探究を軸にした普通科改革は大きな可能性を持つ取組として受け止められていた。

特に、地域の総力を挙げて生徒の学びを支えようとしている点、ICTの強みを生かしながら新しい形の学びを模索している点、学校の中に閉じず地域とともに学びをつくろうとしている点は高く評価されていた。また、地域を学びの場にするすることで、一度は都市部に出ていく生徒であっても、将来的に地域に戻って何かをしたいと思うきっかけになるのではないかという期待も共有された。

一方で、課題提起も明確であった。

探究を「生徒のやりたいことをやる時間」で終わらせず、その先にどのような地域課題や他者への価値、社会的意義があるのかを意識させる必要があるという点である。生徒の関心や好きなことを否定するのではなく、それを社会や地域と接続し、なぜ今それをやるのかという問いを深めていくことが求められているという意見が複数の立場から出された。

また、地域未来学・地域未来科を日星高校だけの取組として終わらせず、他校や小中学校、さらには地域外にも広げていく視点の必要性も指摘された。人口減少が進む中で、限られた地域内だけを見ては先細りになる可能性が高く、ICTやオンラインも活用しながら、学びのメソッドやストーリーを外部へ発信し、舞鶴や日星高校に関わる人を増やしていくことが必要ではないかという提案があった。これは、単なる広報戦略ではなく、地域の学びを外へ開くことで、人や関係性を呼び込み、教育そのものを地域の魅力として再構成していく発想である。

さらに、教員の動き方や学校内部の体制づくりも大きな課題として認識された。探究を支えるには、教員がどのように伴走するのか、地域とどうつながるのか、どのように生徒のニーズを見取りながら支援していくのかを学校全体で共有していく必要がある。

探究の成否を個人の力量に委ねるのではなく、学校の組織として支える体制へと高めていくことが求められているという点は、非常に重要な論点であった。

第1回コンソーシアム会議では、地域未来学および地域未来科の構想が、人口減少時代の地方高校における新しい教育の可能性として大きな期待を集めていることが確認された。生徒の関心や好きなことを出発点にしながらも、それを他者や地域、社会への貢献と結びつけ、進路形成や将来像の構築へとつなげていくことが、日星高校の探究に求められる方向性として共有された。

また、その学びを学校の中だけで完結させず、地域・行政・企業・専門学校・大学・他校・海外との接点へと広げていくことの重要性も確認された。今回の会議は、地域未来学を支える外部ネットワークの可能性を可視化するとともに、今後の実践に向けて、学校がどのような支援を求め、どのような学びを目指していくのかを整理する出発点となる場であった。

【令和7年度第2回コンソーシアム会議会議】

1. 日時 令和8年3月17日(火)10時~12時
2. 場所 日星高等学校 未来のアトリエ教室
3. コンソーシアム委員数 11名
4. 出席委員数 8名

舞鶴商工会議所青年部 和田員之
舞鶴市教育委員会学校教育課主任 前田暁代
舞鶴市政策推進部企画政策課企画調整係長 小谷操
一般社団法人KOKIN 原田翔太
京都府立大学公共政策学部教授 窪田好男(Web)
舞鶴YMCA国際福祉専門学校代表 阿部和博(Web)
KATALab代表 高田智哉
みんなあの居場所彦一郎 代表 水嶋純作

5. 学校側出席者 6名

学校法人聖ヨゼフ学園理事長 小林圭児
同 法人事務局次長 小林圭太

日星高等学校校長 滋野哲秀
同 教頭 吉岡達也
同 探究主任 小谷英里
同 コーディネーター 能勢ゆき

第2回コンソーシアム会議では、普通科改革支援事業2年目の取組報告と、2026年度開設予定の「地域未来科」を見据えた今後の方向性について共有がなされた。学校側からは、現在の2年生が履修している「地域未来学Ⅰ」、来年度3年生で履修予定の「地域未来学Ⅱ」を、地域未来科につながる試行的なカリキュラムとして位置付けていることが説明され、今年4月入学生が地域未来科の第1期生となる中で、今後それをどのように1年次からの探究活動と接続し、正式な教育課程として構築していくかが大きなテーマとして示された。あわせて、地域を舞台にした探究活動が、生徒の学びや成長、進路形成、地域との関係づくりにつながるかが実践事例とともに報告され、委員からは今後の発展に向けた意見や提案が寄せられた。

学校側からは、普通科改革支援事業の採択時点から課されていた「普通科を普通のままで終わらせず、地域未来科へと改革していく」というミッションについて説明があった。現在の2年生は「地域未来学Ⅰ」を履修し、来年度には3年生で「地域未来学Ⅱ」を履修する予定であり、これらは新設される地域未来科の実質的な試行段階として位置付けられている。

加えて、今年度の推薦入試における小論文の中で、「舞鶴をベースに探究をしたい」「地域未来科を意識して学びたい」と記した中学生が十数名いたことも紹介され、学校改革の方向性が中学生や受験生にも一定程度伝わり始めていることが共有された。これは、単なる校内改革にとどまらず、学校の学びの特色が外部にも認識されつつある兆しとして受け止められた。

続いて、地域未来学における実践事例が紹介された。

「地域の魅力を込めた帽子づくり」では、野球部の生徒たちが、修学旅行に向けて自分たちのオリジナル帽子を作りたいという思いから活動を始め、それを舞鶴らしさを込めた商品開発へと発展させた。帽子の素材や形状を自分たちで調べ、地域企業と連携しながら刺繍や製造工程、価格設定、販売の方法まで含めて検討を進めていった。最終的には一定数の販売にもつながったが、その過程で、生徒たちは「自分たちが良いと思うもの」と「相手がほしいと思うもの」は必ずしも一致しないこと、価格やデザインは使う側の視点や市場性を踏まえて考えなければならないことを学んでいった。単なるものづくり体験ではなく、地域資源を活用しながら、企画・販売・振り返りまでを経験する探究として整理されていた。

「ビンゴ大会プロジェクト」では、当初は校内で有料のビンゴ大会を企画したものの、参加者が集まらず、結果として失敗に終わったことが共有された。しかし、生徒たちはその失敗をそのまま終わらせるのではなく、なぜ人が来なかったのか、何が魅力として伝わっていなかったのかを振り返り、大学生や教員、地域の大人の助言を受けながら企画を再構成していった。最終的にはクリスマスイルミネーションなど地域イベントと連動した形で実施し、参加しやすさや広報の工夫、景品調達の方法なども見直したことで、多くの人を巻き込む企画へと改善された。この事例は、探究において「最初からうまくいくこと」よりも、「失敗を受け止め、対話を通じて改善し、再挑戦すること」に大きな価値があることを示す象徴的な実践として報告された。

「歌を通して地域の人とつながろうプロジェクト」では、合唱が好きな生徒と保育士志望の生徒が協働し、高齢者や子どもたちとの交流を生み出すことを目的に企画を進めていった。当初は「歌を披露する」という活動そのものが前面に出ており、何のために行うのかという目的が曖昧であったため、地域の関係者から厳しい指摘を受けたという。しかしその後、生徒たちは、自分たちの本当の目的が「歌うこと」ではなく、「歌を媒介にして多世代交流の場をつくること」にあると捉え直し、相手の立場や場のづくり方を意識しながら企画を練り直していった。活動を通して、生徒たちは自分たちの思いだけで企画を進めるのではなく、参加者の年齢や状況、移動手段や安全面なども含めて考える必要があることを学んでおり、相手にとって意味のある活動とは何かを問い直す探究になっていた。

「舞鶴版 ito プロジェクト」では、図書館イベントに若者の参加が少ないという課題意識から出発し、カードゲーム「ito」を舞鶴版として再構成することで、多世代が対話を通じてつながる企画づくりが進められた。活動の中では、図書館課との対話やワークショップへの参加を通して、単なるゲーム制作にとどまらず、新しい図書館の在り方や交流拠点としての機能まで視野に入れた提案へと発展していった。一方で、イベント自体の満足度は高かったものの、中学生の参加が思うように伸びなかったことが課題として挙げられた。その背景として、中学生への周知が「校長から担任へ、担任から生徒へ」という間接的な伝達になってしまい、生徒自身の熱量や思いが十分に届かなかったことが振り返られた。ここから、生徒たちは、自分たちの思いや活動の魅力は、自分たち自身の言葉で直接届けなければ伝わりにくいということを実感し、「熱量をどう届けるか」という新たな問いを得ることとなった。

また、継続的に海ごみアートの活動に取り組んできた3年生が、その経験をもとに総合型選抜で大学合格を果たした事例も共有された。これは、探究が単なる一過性の活動ではなく、自己理解や進路形成につながる学びとして機能していることを示す事例として位置付けられた。探究活動を通して、自分が何に関心を持ち、どのような価値を大切にしたいのかを言語化し、それを自らの進路選択へと接続していく姿が見られたことは、地域未来学の意義を示す具体的な成果として受け止められた。

教員側・学校運営側の取組については、教員自身が外部研修や対話の機会を通して探究を支える力を高めようとしていること、また、大学生の伴走支援が生徒の行動変容に大きく寄与していることが報告された。

特に龍谷大学を中心とした大学生との関わりは、生徒にとって年齢の近い「壁打ち相手」として機能しており、対面・オンラインの両面で継続的に対話ができることが、生徒の思考の深まりや行動の後押しにつながっているという説明があった。教員数が限られる中で、生成AIも補助的な壁打ち相手として活用していることが共有され、人とAIの両面から生徒の探究を支える体制づくりが進められていることが示された。

さらに、今後は1年次で関係性づくりや自己理解、ミニ探究を行い、2年次で本格的なプロジェクト型探究、3年次でその総括と進路への接続を図るという3年間の見通しを持ったカリキュラム構築が構想されていることも説明された。

一方で、成果だけでなく課題も共有された。その一つが、「よく動く生徒は大きく伸びるが、なかなか動き出せない生徒も多い」という点である。生徒によっては、一度動き始めると次々に新しいアイデアや行動が生まれていく一方で、最初の一步を踏み出せずにいる生徒も少なくないことが率直に語られた。

学校側としては、探究を一部の意欲的な生徒だけのものにせず、動き出せない生徒にどう足場を用意し、伴走し、少しずつ自分ごと化へつなげていくかが大きな課題であるという認識を示した。あわせて、探究活動の成果や課題を探究の時間だけの問題として捉えるのではなく、教科指導とも結び付けながら学校全体で育てる必要があるという問題意識も共有された。

委員からは、全体として、日星高校の地域未来学の取組が着実に前進していることへの評価が示された。特に、地域の課題を自分たちの問いとして捉え、失敗しながらも地域の大人や大学生と対話を重ね、企画を改善していく実践は、高校生の学びとして非常に価値が高いという見方が共有された。

また、現在の社会では、単に勉強ができるだけでは通用せず、他者と関わりながら考え、動き、試行錯誤する力が求められているという観点から見ても、日星高校で生徒が取り組んでいる探究活動には、これからの社会で必要とされる資質・能力が多く含まれているとの意見があった。特に行政の立場からは、若い職員にも不足しがちな力が、むしろ高校段階で育ち始めているのではないかという評価が示され、地域未来学の意義が学校内にとどまらないものとして受け止められていた。

その一方で、委員からは今後に向けた具体的な課題提起もなされた。

一つは、取組の価値のわりに、外部への発信がまだ十分とは言えないのではないかという指摘

である。学校の中で良い実践が生まれていても、それが地域や中学生、保護者、外部の関係者に十分に届かなければ、学校改革としての広がりや持続性にはつながりにくい。実践の内容だけでなく、それをどう社会に伝え、学校の魅力として可視化していくかが今後ますます重要になるという認識が共有された。

また、生徒の学びに意味を持たせるためには、「今の探究活動が何につながるのか」をより腹落ちする形で示す仕組みが必要ではないかという提案もあった。

たとえば、3年後、5年後に自分がどのような人間でありたいのか、どのような生き方をしたいのかという将来像を描き、そこから逆算して今必要な学びや行動を考えるような支援があれば、探究活動の価値がより自分ごととして理解されやすくなるのではないかという意見である。

探究を単なる課題研究としてではなく、自分の生き方や働き方、社会との関わり方を考える入り口として位置付けることの重要性が示唆された。

さらに、アンケート結果や評価の扱いについても示唆があった。数値の低い項目や課題だけを取り上げて分析するのではなく、上がっている項目や伸びている側面にも着目し、それが何によって生まれているのかを丁寧に読み解く必要があるという意見である。

また、学校側が整理している育てたい力や評価の言葉についても、独自性がある一方で、外部にも説明可能な形で概念を精査していく必要があることがうかがえた。

つまり、取組が進んできたからこそ、次の段階では実践を支える言葉や評価軸そのものをより明確にし、共有可能なものへと整えていくことが求められていると考えられる。

第2回のコンソーシアム会議では、日星高校の地域未来学が、単なる「活動を行う場」から、地域と関わりながら問いを立て、失敗し、他者と対話し、改善し続ける学びへと深まりつつあることが確認された。特に、地域企業、大学生、行政、図書館など多様な外部との接点を持ちながら、生徒が自らの関心や違和感を出発点に行動し、そこで得た経験を進路や自己理解へと結び付けている点は、大きな成果として位置付けられる。

一方で、その学びを一部の生徒の成功事例にとどめず、動き出せない生徒への支援、教科との接続、評価の精度向上、そして地域や中学生への発信の強化へと広げていくことが次の段階の課題として明確になった。

今回の会議は、地域未来科本格始動の前段階として、日星高校の探究が十分な可能性を持つ一方で、それを学校文化として定着させ、より持続的な学びへと発展させるために何が必要かを共有する場となった。

Ⅶ 探究における伴走支援と生成 AI 活用の必要性

【大学との協働による伴走支援体制】

大学との連携においては、「大学教員による専門的助言」と「大学生による探究伴走」を組み合わせた二層型支援モデルを構築した。

福知山公立大学とは、教員およびそのゼミ生の双方と協働している。教員からは教育課程設計や地域課題研究に関する理論的助言を受けるとともに、ゼミ生が生徒の探究活動に継続的に関わることで、理論と実践が接続された伴走体制を実現した。

また京都府立大学からは、地域研究の観点から助言を受け、探究活動の体系化と質的向上を図った。

さらに、立命館大学、龍谷大学、大阪大学の学生による探究伴走支援を導入している。地方都市において大学生メンターの確保は容易ではないが、オンラインおよび対面を組み合わせた支援により、生徒が多様な価値観や社会的視点に触れる機会を創出した。特に龍谷大学とは継続的な連携関係を構築しており、探究発表への助言や対話型伴走を通して生徒の問いの深化を支えている。

【生成 AI 活用の必要性】

探究的な学びにおいては、生徒が自ら問いを立て、試行錯誤を重ねながら学びを深めていく過程が重視される。その過程では、適切な問い返しや思考整理を行う「伴走者」の存在が極めて重要である。

都市部の学校では、大学との距離的な近接性を活かし、大学生や研究者がメンターとして関わる事例も多く見られる。しかし、地方に位置する本校においては、継続的に外部伴走者を確保することは容易ではない。

人口減少や地域資源の偏在により、探究活動を日常的に支援できる大学生や専門人材が身近に存在しない状況は、地方高校が共通して抱える構造的課題である。

その結果、生徒が課題設定や活動の途中で思考を止めていたり、教員が個別支援を担いきれず探究活動の深まりが限定的になるといった問題が生じやすい。

本校では、この課題を解決するため、生成 AI を「代替的な人材」としてではなく、「常時アクセス可能な思考伴走者」として活用する取組を進めている。

独自に開発・運用している AI エージェント「導きさん」は、生徒に答えを提示することを目的としたものではなく、問い返しや振り返りを通して思考を促進する設計となっている。

生徒は活動の中で行動(Action)を起点とし、AI との対話によって経験を理解(Understanding)し、状況を整理(Orient)しながら次の意思決定(Decide)へと進む。そして再び行動(Act)へと循環していく。

この AI 伴走環境により、時間や場所に制約されることなく、生徒が自ら思考を進め続けることが可能となった。

地方において人的資源が限られる状況だからこそ、生成 AI を活用した伴走型学習環境の整備は、教育機会の格差を縮小し、生徒の主体的な学びを保障する新たな教育モデルとなり得る。

VIII 2025 年度「舞 Way!」(総合的な探究の時間)実施報告

【自己の問いと向き合い続けた1年間】

総合的な探究の時間「舞 Way!」では、前年度までのゼミ制による運営体制を見直し、本年度より学年制へと移行した。学年全体で探究の進捗や課題を共有しやすくなり、教員が生徒一人ひとりの状況を把握しながら継続的に指導・支援を行う体制の整備が進んだ。学年単位での協働的な指導体制を構築することで、探究活動の質の均質化と段階的育成を図った。

1年生においては、自己理解を出発点として問いを設定し、それぞれの探究テーマを決定し発表を行った。調査活動が中心となり調べ学習にとどまる事例も見られた一方で、独自の視点から考察を深め、研究としての発展性が見られる取組も生まれるなど、探究活動の基礎的な力の育成が確認された。問いを立てる力や自らの関心を言語化する力の醸成という点で、探究の土台形成は着実に進んでいる。

2年生においては、「地域未来学Ⅰ」での学びを基盤としながら、生徒主体で新たなプロジェクトが創出されるなど、問いの設定から課題解決に向けた実践的活動へと発展が見られた。地域との連携を伴う取組も増加し、探究活動が教室内にとどまらず、社会と接続する学びへと拡張している。基礎的探究力が応用段階へと移行しつつあることがうかがえる。

3年生では、前年度から継続して取り組んできたプロジェクトが発展し、商品開発・販売や地域イベントの企画運営など、実社会における具体的実践へと展開した事例が見られた。

また、自身の「好き」や関心を深掘りする探究活動を通して、総合型選抜等の進路選択へと結び付ける生徒も現れ、探究活動がキャリア形成と接続する成果が確認された。探究が単なる学習活動ではなく、生徒の進路決定や自己実現に資する教育的基盤として機能していることが明らかとなった。

以上のように、「舞 Way!」は1年次の問いの形成、2年次の社会接続型実践、3年次の実社会への展開という段階的成長モデルを形成しつつある。学年間の接続を意識したカリキュラム設計により、探究力の継続的育成が可能となっており、本校における探究教育の体系化が進展している。

【1年生】

1年生においては、探究活動の基盤となる安心・安全な学習環境の形成と自己理解の促進を重視し、年度当初より段階的な取組を実施した。

4月には、安心して対話や挑戦ができる関係性づくりを目的として、チームビルディング活動および「ウォークラリー in 西舞」を実施した。地域を歩きながら仲間と協働して課題に取り組む経験を通して、生徒同士の信頼関係の構築を図るとともに、活動後にはアウトプットの機会を設け、経験を振り返り言語化する力の育成を行った。

5月から6月にかけては、「自分プレゼン」や自己分析活動を中心に据え、自身の経験や関心を振り返りながら自己理解を深める取組を行った。ワールドカフェ形式での対話活動を通して他者の視点を取り入れ、自らの価値観や関心を言語化する力の育成を目指した。

7月には「探究 DAY」を実施し、地域で活躍する多様な立場の方々との交流機会を設けた。実社会で挑戦を続ける大人の姿に触れることで、生徒が社会との接点を実感し、自身の関心や問いを広げる契機となった。その後、「ちょこプロ」において課題設定から発表までの一連の探究活動を体験し、問いの設定や情報収集、振り返りの基礎的手法を体験的に学んだ。

2学期以降は、本格的な個人探究へと移行した。9月には関心や経験をもとに問いを見つけ深める活動を行い、10月には探究テーマの仮決定を行った。また、2・3年生による中間発表を聴講する機会を設け、上級生の実践から探究の進め方や到達イメージを学ぶことで、自身のテーマ設定や計画立案につなげた。加えて大学見学を実施し、学問領域や進路への視野を広げながら探究テーマの深化を図った。その後、プラン書の作成に取り組み、自らの問いを具体的な活動計画へと整理した。

11月にはプラン書のブラッシュアップを行うとともに、大学生とのオンライン壁打ちを通して外部視点から助言を受け、計画の具体化を進めた。また、関心のある分野で活動する人物へのインタビューを計画・実施するなど、アクションプランの策定に取り組んだ。

12月の「探究 DAY」では地域でのインタビュー活動を行い、社会との対話を通して問いの検証を進めた。

3学期には成果の整理と発信に重点を置き、1月に最終発表（ポスター発表）を実施した。また、先輩との交流機会を設け、上級生の探究実践に触れることで探究の多様な在り方や発展可能性を学んだ。

2月には立命館大学学生によるメディアリテラシー講義を実施し、情報の扱い方や発信の責任について学ぶ機会を設けた。これは2年次以降の地域探究へと接続する学びとして位置付けている。

【実践例1 関係性づくり — ウォークラリー in 西舞鶴】

1年次における探究活動の導入として、生徒が安心して対話や挑戦を行える学習環境の形成を目的に、「ウォークラリー in 西舞鶴」を実施した。本活動では、チームで地域を歩きながら課題に取り組むことを通して、生徒同士の関係性構築を図るとともに、日常的に生活する地域の中にある新たな魅力や課題に気付く機会を設けた。

活動後にはアウトプットの時間を設定し、地域で発見したことや感じた価値を言語化し共有することで、他者の視点を取り入れながら学びを深めた。生徒同士が互いの気付きや考えを尊重し合う経験を積むことで、安心して問いを発信できる学習風土の醸成につながった。

また、本取組は単なる関係性づくりにとどまらず、「身近な地域そのものが探究の対象となり得る」という視点を育成することをねらいとしている。自らの生活圏に目を向け、疑問や関心を見出す経験を通して、後の個人探究における問いの設定へと接続する導入的实践として位置付けた。



【実践例2 自分プレゼン — 自己理解と他者理解の基盤形成】

探究活動を主体的に進めるためには、自らの関心や価値観を理解し、それを他者に伝える力が不可欠である。そこで1年次においては、「自分の取扱説明書（自分の取説）」の作成を通して、自己理解と他者理解を深める取組を実施した。

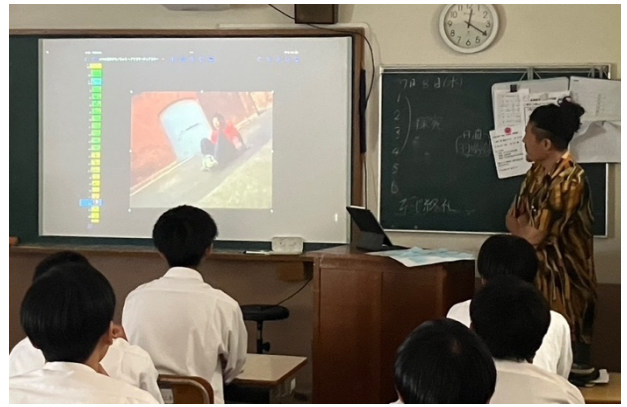
まず自己紹介シートを作成し、自身の経験や関心、強みを整理した。その後、対話練習として「話し手」と「聞き手」の役割を意識したペアワークを行い、相手の話を受け止めながら問い返す経験を重ねることで、他者理解や傾聴の姿勢を育成した。また、「自分グラフ」を用いてこれまでの人生の転機や感情の変化を振り返ることで、自身の価値観や興味関心の背景を客観的に捉える機会とした。

さらに地域の方々との対話機会を設け、自分の考えを言葉にして伝える経験を積むとともに、外部視点からの問いや助言を受けることで自己理解を深めた。加えて1分間スピーチの練習を行い、自分の考えや関心を限られた時間の中で整理し、端的に伝える力の育成を図った。

当初は自分の経験や考えを言語化することに戸惑いを見せる生徒も多く見られたが、対話や振り返りを重ねる中で、自身の関心や価値を肯定的に捉え、主体的に発信しようとする姿勢の変化がうかがえる生徒も見られた。また、他者の背景や価値観を尊重しながら対話を行おうとする様子も見られるようになり、探究活動に必要な協働的学習態度の基盤形成につながりつつある。本実践は、生徒が自ら問いを立て探究を進めていくための出発点として位置付けている。

【実践例3 探究 DAY — 多様な価値観との対話による自己の再構築】

7月に実施した「探究 DAY」では、12名の外部講師を招き、生徒が多様な生き方や価値観に触れる機会を設けた。講師には、海洋プラスチックアーティスト、保健師、地域おこし協力隊、クリエイター、フリースタイルフットボールプレイヤー、看護師、アパレルショップオーナー、レストランオーナーシェフ、生活支援コーディネーター、心理カウンセラー、住職など、分野や背景の異なる多様な立場の方々が参画した。



本取組では、一方的な講話形式ではなく、少人数での対話を中心とした「壁打ち」形式を採用した。生徒は事前に整理した自身の関心や価値観をもとに講師と対話を行い、自らの問いや将来像について率直に意見交換を行った。

対話を通して、自分の関心が社会とどのようにつながり得るのかを具体的にイメージできるようになった生徒や、これまで曖昧であった興味関心が明確化していく様子もうかがえた。また、多様な価値観や人生の選択に触れることで、「正解は一つではない」という認識が広がり、自分なりの問いを持つことの意味を実感する姿も見られた。

本実践は、1学期に取り組んだ自己理解の学びを社会との接点の中で再確認し、「自分探し」をより具体的な問いへと発展させる機会として位置付けている。さらに、対話を通して生まれた関心や課題意識をもとに、生徒が主体的に探究活動へ踏み出す契機となり、夏季休業中に実施した短期探究プログラム「ちょこプロ」へと接続した。



【実践例4 ちょこプロ — 行動から始める探究 (A→UODA) の実践】

夏季休業中に実施した短期探究プログラム「ちょこプロ」は、1学期に育成した自己理解や社会との対話を踏まえ、生徒が実際に行動を起こすことを目的とした実践である。

本校では、探究活動が「計画だけで終わる」「情報収集中心の調べ学習にとどまる」といった課題を乗り越えるため、まず行動 (Action) から始める探究サイクルを重視している。行動を起点とし、その経験を振り返ることで理解 (Understanding) を深め、状況を整理し (Orient)、次の意思決定 (Decide) を経て再び行動 (Act) へとつなげる「A→UODA」の循環を探究の基本構造として位置付けている。

「ちょこプロ」では、生徒が自身の関心や問いをもとに、小規模でも具体的な行動を計画・実行した。調査やインタビュー、体験活動などを通して実社会の中で試行する経験を積み、その後の振り返りにより問いの妥当性や課題の明確化を図った。

実際に行動してみると、当初のテーマ設定の曖昧さや実現可能性の課題に気付く生徒も見られた一方で、関心がより具体化し、新たな問いへと発展していく様子もうかがえた。本実践は、

思考にとどまらない探究姿勢を育成する導入段階として位置付けており、2学期以降の個人探究の深化へと接続している。

実際に「ちょこプロ」で出てきた事例

- ① 美術部に所属する生徒が、コンクールに応募するための作品作りに挑んだプロジェクト。作品作りにおいて、風景のリアルさをひき出すため、習得していない技法に挑み、自分なりの表現法を見つけた。
- ② 韓国文化に関心のある生徒が、語学検定合格という目標を立て、夏休み期間中語学学習に努めた。
- ③ イラストが好きな生徒が、オリジナルキャラクター作成に挑んだ。人気のあるキャラクターの傾向を調べ、キャラクターをデザインした。

このように、自分の関心や課題から問いを立てた生徒については、「ちょこプロ」は探究を進める上で、よい練習材料になった。

その一方で、課題も明らかになった。本来は、生徒が自分の興味・関心から設定した「ちょこプロ」のテーマについて理解を深めるため、まず何かしらの実践を行い、その結果から新たな問いが生まれるという体験をさせることを意図していた。

しかし実際には、従来型の調べ学習、すなわちインターネットで調べた内容をまとめる活動から脱却できない生徒も多く見られた。

夏休み期間中は教員が直接伴走することが難しいため、生徒の活動を実践的な探究へと導くことの難しさが明らかになった

【実践例5 問いの生成と再構築 — 調べ学習からの転換】

2学期前半(9~10月)は、生徒が自らの関心を探究テーマへと具体化することを目的とし、「問いの生成と再構築」に重点を置いた実践を行った。

生徒は自分の関心や違和感を出発点に問いを立てる活動に取り組んだ。その際、「よりよい」「活性化」「安心」といった抽象的な語に留まらず、何をもって“よりよい”とするのか、誰にとっての“活性化”なのかを言語化する指導を行い、問いを具体化・焦点化することを重視した。また、一つのテーマについても心理的側面、社会的背景、制度的要因など複数の観点から検討することで、多面的に捉える視点を育成した。

次に、生徒は一度調査活動を行い、先行事例や既存情報を整理した。調査を進める中で、当初の問いが既に答えの明らかなものや、単純な原因と結果では説明できないことに気付く場面も見られた。そこで、調査によって生じた新たな疑問から再度問いを立て直す活動を行い、「調べれば分かる問い」から「考え続ける価値のある問い」へと再構築することを目指した。

さらに、大学見学や2・3年生の探究中間発表の参観を通して、学問的探究や実践的プロジェクトの具体例に触れる機会を設けた。他学年の取組から学ぶことで、自身の問いの甘さや可能性に気付く生徒も見られ、問いの視野を広げる契機となった。

本実践は、生徒が単なる情報収集に留まらず、調査と再問いの往還を経験することで、探究活動における思考の深まりを実感する段階として位置付けている。

【実践例 6 対話的伴走による問いの深化とアクションプランニング】

10月下旬から11月にかけては、再構築した問いを実社会での行動へと接続することを目的とし、ミニ探究のプランニングおよび問いの精緻化に取り組んだ。

10月下旬には、これまで生成・再編集してきた問いを基に「ミニ探究プラン書」の作成を開始した。生徒はテーマ設定の動機を改めて言語化するとともに、既に調べた内容と今後調査すべき内容を整理し、探究の方向性を具体化した。また、インタビュー対象者の想定や質問項目の検討を通して、問いを実行可能な形へと落とし込む活動を行った。

11月には、まず、教員や地域コーディネーター、地域人材が伴走者として参画し、生徒が必ず他者と対話を行う時間を設定した。生徒は自身の問いや調査内容を説明しながら助言を受け、問いの焦点化や探究方法の見直しを進めた。引用資料の整理や根拠の明確化についても指導を行い、単なる調べ学習に留まらない探究活動としての基盤形成を図った。

続いて、大学生が伴走者として参加する対話型授業を実施した。生徒は「なぜその問いを深めたいのか」「その先で何を実現したいのか」を問い直しながら議論を行い、多様な視点から助言を得ることで問いの再構築を行った。また、インターネット情報の信頼性確認や複数資料による裏付けを求めることで、情報の質を高める指導を行った。

さらには、実践に向けたアクションプランの具体化を行った。生徒は先行研究や事例を再調査するとともに、インタビューやアンケート調査の対象者選定、質問内容の検討、実施方法の選択などを行い、根拠に基づいた調査設計を学んだ。また、これまでの取組を整理する時間を設けることで、新たな気付きや問いの更新につながる場面も見られた。

このように対話を通して問いを明確にするプロセスを導入したことにより、昨年度と比較して問いの精度は明らかに向上し、目的意識を持って探究に取り組もうとする生徒が増加した。一方で、当初から明確な目標や目的を持っていない生徒については、対話のたびにテーマが変化する場面も見られた。また、対話を通して問いが深まることで、新たな関心が生まれテーマを変更したいと感じても、「途中でテーマを変えてはいけいのではないか」と感じてしまう生徒も一部に見られた点は、今後の指導上の課題である。

対話を通して問いを明確にする作業を導入したことによって、昨年度と比べると明らかに問いの精度が上がり、目的を持って探究に取り組もうとする生徒が増えた一方で、最初から明確な目標や目的を持っていない生徒については、対話の度にテーマが変わる事例、逆に対話から問いが深まったが故に一部の生徒には、別のテーマに変えたいと思っても、変えたらいけないのでは？と思わせてしまったことが反省点である。

【実践例 7 探究 DAY における多面的情報収集と研究的探究への発展】

12月に実施した探究 DAY では、11月までに学んだインタビューおよびアンケート調査の手法を実践段階へ移行し、生徒が自身の問いを実社会の中で検証する機会を設けた。本取組は、教室内で精緻化してきた問いが社会の現実と接続したときにどのように揺さぶられ、再構築されるのかを体験する重要な機会として位置付けている。

当日は、地域で活動する方への訪問インタビューやオンラインでの専門家ヒアリング、アンケート調査の実施など、生徒が自ら設計したアクションを遂行した。実際に対話を経験した生徒からは、事前調査では気付かなかった当事者の視点や地域特有の背景に触れることで、当初の仮説を見直す姿が見られ、問いの再定義へとつながる場面も確認された。

一方で、調査方法の選択には個人差も見られた。現地での対話やオンラインヒアリングに挑戦する生徒がいる一方、インターネット検索や生成 AI を中心に情報収集を進める生徒も一定数存在した。インターネットや生成 AI の活用は、多様な資料や視点へ迅速にアクセスできる有効な手段であるが、単発的な情報収集に留まった場合には問いの深化につながりにくい側面も見られた。

だが、探究 DAY においては、思考整理や内省を目的とした生成 AI 活用の実践例も見られた。その代表例として、ジャーナリング（書くことによる自己内省）をテーマとした探究が挙げられる。

当該生徒は当初、「学校生活の中でジャーナリングを広めたい」という問いを設定していたが、実際に学校でジャーナリングを試行した結果、「落ち着いて思考できない」「家庭の方が気付きが多い」といった違和感に直面した。この経験を通して、当初の仮説は修正を迫られた。

その後、生徒は生成 AI を対話相手として活用し、自身の感情や思考を言語化する過程を重ねた。生成 AI は答えを提示する存在ではなく、「なぜそう思うのか」「どのような状況で効果があるのか」と問い返す壁打ち相手として機能していた。これにより、生徒は問いを「広め方の工夫」から、「どのような状況下で内省が有効に機能するのか」「困難を抱える人にとってどのような支援となり得るのか」といった視点へと再構築していった。

このジャーナリングの実践を通して、教師側にも大きな示唆が得られた。それは、いわゆる「調べ学習」と見なされがちな活動であっても、複数の情報源を往還し、仮説を立て、実践を通して検証し、その結果をもとに問いを更新していく過程を伴えば、十分に研究的探究へと発展し得るということである。調査方法の違いそのものではなく、問いがどのように変容していくかというプロセスに着目する重要性を、教師自身が学ぶ機会となった点は、本実践の大きな成果である。

この過程で育まれたのは、情報処理能力にとどまらず、自己の感情や思考を客観視する力、仮説が崩れた際にも問いを更新する柔軟性、他者の立場を想像する視点、そして自身の経験を社会的価値へと転換しようとする姿勢といった非認知能力である。

生成 AI の活用は、単なる情報収集の代替ではなく、生徒の内省を支援し問いを再構築する思考支援ツールとして機能した。本実践は、生成 AI が「答えを与える存在」ではなく、「問いを深めるための伴走者」となり得る可能性を示すものである。

探究 DAY は、生徒が問いを社会の中で検証し、その結果を再び思考へ持ち帰る循環を経験する機会となった。本実践は、探究活動を情報収集段階にとどめず、実践と再構築を繰り返す動的な学びへと転換する中核的機会として位置付けている。

践的学びへと転換する重要な契機となった。

【実践例 8 最終報告会（ポスター発表）における成果共有と対話的評価の課題】

1 月には 1 年間の探究活動の集大成として最終報告会を実施し、1 年生全員によるポスター発表を行った。本年度は計 77 本の探究テーマが発表され、生徒一人ひとりが自身の問いに基づいて取り組んできた成果を共有する機会となった。

発表は「3 分間の説明」と「2 分間の質疑応答」により構成し、限られた時間の中で自身の問いや実践内容、得られた気付きや今後の課題を他者へ伝えることを目的とした。生徒はポスターの構成や説明方法を工夫しながら、自身の探究を言語化する経験を積んだ。

発表を通して、自らの実践を客観的に振り返る姿や、他者の探究に触れることで新たな関心を

見出す様子も見られ、学年全体で学びを共有する機会となった。

一方で、質疑応答の場面では質問が十分に生まれえない場面も見られ、聞き手が問いを持ちながら対話を行う力の育成が今後の課題として明らかになった。発表する力に比べ、他者の探究を批判的・建設的に捉え質問として表現する経験が不足していることが背景として考えられる。



本校では、探究活動を「発表して終わる学び」とせず、対話を通して問いをさらに更新していく学びとして位置付けている。今後は質問づくりや相互評価の機会を授業内に計画的に位置付けることで、聞き手としての探究力の育成にも取り組んでいく必要がある。

【実践例9 振り返りと次年度探究への接続】

最終報告会后には振り返りの時間を設け、生徒が自身の探究活動を再評価するとともに、次年度の探究へ視野を広げる機会を設定した。

振り返りでは、2年生の優れた探究実践を行った生徒との対話の時間を設けた。1年生はテーマ設定の難しさや行動に踏み出した経験、問いがどのように変化していったのかについて直接話を聞くことで、探究の具体的なイメージを持つことができた。成果のみならず、試行錯誤や失敗の経験が共有されたことで、生徒は探究を単年度で完結するものではなく、継続的に深化させていく学びとして捉える契機となった。

さらに、立命館大学の学生によるメディアリテラシー講義を実施し、「情報とは何か」「どのように情報を活用するのか」という根本的な問いについて考える機会を設けた。講義では、情報の信頼性の判断や複数資料の比較検討、情報環境が思考に与える影響などについて具体例を交えながら学び、生徒は情報を受け取る立場から、主体的に選択し活用する立場へと視点を転換する経験を得た。



1年次の探究では、インタビューや実践活動に挑戦する生徒がいる一方で、インターネット検索や生成 AI による情報収集に留まる姿も見られた。そのような状況を踏まえ、立命館大学学生によるメディアリテラシー講義を実施し、「情報とは何か」「どのように活用すべきか」を問い直す機会を設けた。

講義を通して、生徒は情報の信頼性や多角的な視点の必要性について学び、単なる情報収集から仮説検証へと学びを発展させる視点を得た。



単なる調べ学習にとどまらず、生徒が情報を多面的に捉え、仮説検証を繰り返しながら問いを発展させていく姿の育成を目標としている。本年度のメディアリテラシー教育は、その橋渡しとなる段階として位置付けている。

2年生の対話を通して明らかになったのは、「動かなければ何も始まらない」という学びである。仮説が崩れる経験や思い通りに進まない実践も多く見られたが、そうした試行錯誤こそが次の問いを生み出す原動力となった。失敗は終点ではなく問いを更新するための出発点であり、生徒が挑戦し、揺らぎ、再び問い直す過程そのものを価値ある学びとして位置付けている。

【2年生】

2年生は、1年次に1年間、自分の好きなことを探す。それをテーマに活動してきた経験を基に、その内容を自分の中でブラッシュアップし、自律的に活動できるようになることを目的としている。また、その中で自分の適性やアイデンティティをメタ認知するとともに、地域やグループの中でコミュニケーションを取りながら、社会的に求められる知識や能力を身に付けていくことも併せて目指している。大まかな流れとして、クラスづくり→ちょこプロ→ガチ探の順に行い、最終的には一つのテーマで探究活動を行った。

カリキュラムの作成においては、1年次に多く見られた調べ学習からの脱却を強く意識した。昨年度では、教員と対話をしても外部に調査に出かけようとする生徒は少なく、ひたすらインターネットで調べ続ける生徒が散見された。それでは先に述べた目的が達成されないと考え、「フィールドワークに行く日」を設定したり、「中間報告会までに2ターン以上は回す」といった、この期間中に具体的にどのような行動・作業を行う必要があるのかを明確にした行動目標を設け、教員と生徒の共通認識として臨んだ。

2年生は配慮が必要な生徒がいたことや、各生徒との信頼関係ができていたことから、クラス進行をベースとして活動を進めた。教員は週に1回程度レク会の時間を設け、各担任と探究部との話し合いを行い、進め方をその都度確認しながら足並みを揃えて活動の運営に当たった。

4月は今後探究学習を進めていくための基礎をつくる期間とし、クラス内での心理的安全性を高めるためのアイスブレイク活動を行った。新しくクラスメートになった仲間のジェスチャーの上手さや、しぐさの面白さなどをきっかけに自然と笑顔が生まれ、和気あいあいとした雰囲気形成することができた。また、活動を通じてリーダーシップを発揮できる生徒も明確になってきた。2週間チームビルディングを行ったあと、大型連休に行うちょこプロの課題設定を行った。

ちょこプロでは探究学習のサイクルを一通り体験することを目的とし、課題発見・設定→計画作成→整理分析→まとめ・表現→フィードバック・計画修正の流れで2サイクル実施した。昨年のテーマを引き継ぐかどうかは生徒自身が決めるものとした。1週間の中で実際に実行できるものをテーマとし、行動計画を作成した。

5月はちょこプロのフィードバックから始めた。大型連休中に実施した内容をグループで発表し、フィードバックを得た。その中で、他者の発表を聞いて自分で考える練習を行ったり、他者から意見をもらう練習を行った。他者からの意見を参考にして自分のちょこプロの再考を行い、次週にもう一度実施した（ちょこプロ2回目）。

生徒たちが出す意見としては、行ったプロジェクトの一部分を褒める「〇〇が良かった」といったものが多く、自分の行ったことに対して自信を深める生徒も見られた。一方、「対象が多すぎるから絞った方が良い」といった具体的な指摘も見られ、指摘を受けた生徒はそれを受け入れ、修正した内容をちょこプロ2回目で実施していた。

ちょこプロ2回目も1回目と同様にグループで発表しフィードバックを得た。しかし、この時点では「探究学習とは結局何をするのか」が実感として分からない生徒も多く、担任からも「ちょこプロの期間が短すぎるのではないか。例えば筋肉をつけるといったテーマでは1週間では効果が出ず、生徒の実感につながらない」といった意見も出ていた。

生徒たちは「家の片付けをして母親の機嫌がどう変わるか確認する」「晩御飯の後片付けを1週間やってみて自分の力量を知るとともにやり方の改善を図る」「寝る時間を早くして朝も早く起き

る」「晩御飯のあとに素振りをして走る」「勉強時間をいつもより1時間延ばす」といったように、自分にできることをテーマとして設定し実際に行動していた。しかし結果が予想されやすいものが多い、テーマが簡単すぎるなど、実行したことで何が得られたのかを実感しにくい状態であった。

1年次は調べ学習で終わってしまったため盛り込んだプログラムであったが、「自分が実施したことを分析し、その結果をまとめて他者に評価してもらい、計画を再考する」という流れを経験する機会としては有効だった。しかし、生徒の状態を十分に検討し、より実感の持てるプログラムにしていくことが今後求められている。

6月からは「ガチ探」として、1つのテーマを探究していった。まず、自分のテーマを設定するために企画書の作成を行った。企画書では、自分のテーマを中心として「テーマの対象」「対象に関わっている人・場所」といった調査や企画に必要な項目や、「伝えたいこと」「表現方法」といった発信に関する項目など、合計10項目を書き出し、テーマを具体的な企画へと落とし込めるよう深化させていった。

生徒たちは昨年も自分の好きなことをテーマに探究活動を行っていたため、テーマ設定を比較的短時間でできる生徒も半数程度いた。一方で、昨年のテーマに納得していなかった生徒や、自分の好きなことが分からない生徒はテーマ設定に時間を要した。また、すべての項目を順調に埋めていく生徒がいる一方で、時間を要する生徒も見られた。

時間を要している生徒は、担任や巡回していた教員と対話や質問を行ったり、席の近いクラスメートに教えてもらったりしながら作業を進めた。「テーマの対象とは何か」「自分がやることは社会に影響があるのか」といった質問が出ていたが、教員やクラスメートと一緒に作業をする中で、自分の設定したテーマについて多角的に捉えることができた。

続いて、作成した企画書をクラスで発表し、よく似たテーマの企画を持つ者同士でグループをつくった。自分のテーマを中心として、伝えたいことや表現方法などについてプレゼンテーションを行った。生徒たちはプレゼンを聞き、自分と近いテーマを持つ生徒を見つけてグループを形成した。和やかな雰囲気の中でグルーピングが行われ、結果として30グループが誕生した。

グループのルールとして、やりたいテーマが変わった場合にグループを抜けることは可能としたが、すでに活動が進んでいるグループへの途中参加は不可とし、困難に直面しても簡単にあきらめることなく活動を続けることを目指すルールとした。結果としてメンバー変更があったグループは少なく、大半のグループが当初のメンバーで活動を継続することができた。

その後、生徒たちは活動計画を作成し、直近の目標として7月8日・9日の探究DAYでフィールドワークに出ることを設定した。

探究DAYではフィールドワークに出たグループもあれば、大学生とのオンライン相談を通して企画を深めたグループもあった。龍谷大学の学生および卒業生18名とオンライン相談会を実施し、生徒たちは自分たちの探究について相談を行った。当初は緊張していた生徒も、対話を通



して自分たちのテーマを見つめ直し、今後の活動の方向性を具体化していった。

9月には龍谷大学の学生8名が来校し、夏休みまでの振り返りと2学期のアクションについて対話を行った。生徒たちは大学生との対話を通して、中間報告会に向けた計画を整理していった。

10月8日の中間報告会では、すべてのグループがスライド発表を行った。テーマの傾向としては地域を題材としたものが多く、「竹麺」「舞鶴わらしべ長者チャレンジ」「舞鶴市にバッティングセンターを作るにはどうすればよいか」「舞鶴の特産物を使ったスイーツ作り」「dress by the sea～舞鶴の海でウェディングフォト～」などが見られた。

報告会後は評価を生徒と共有した。ゲストからの評価には厳しい内容もあり、生徒は悔しさを感じながらも次の探究へとつなげていった。その後もフィールドワークを重ねながら探究を進め、12月の探究DAYでは最終報告会に向けた準備を行った。

1月21日に最終報告会を実施した。中間報告会から内容を発展させた発表が多く、ゲストからの質問にも一生懸命答える様子が見られた。一方で、生徒からの質問が少ないという課題も見られた。

2月には優秀発表会を実施した。全校の中から2グループを選び、1・2年生の前で発表を行った。発表した生徒たちは大きな達成感を示しており、聞く側の生徒も多くのメモを取りながら真剣に聞いていた。

【実践例1 竹麺（地域の放置竹林の有効活用を通して）】

竹に着目した理由は単純だった。「(自分の教室がある)2階の窓から、(いつも部活で使っている)グラウンドまで流しそうめんをしたら面白いのではないか」といった思いつきからである。「面白そうだ」とそのアイデアに共感した生徒たちは意欲を高め、活動を始めることになった。

竹は身近な存在ではあったが、これまで特別に関心を持ったことのない対象であった。普段は山の景観の一部として存在しており、意識的に「竹」を対象として考えたことはほとんどなかった。また、メンバーの中には大阪出身の生徒もおり、竹林そのものにもあまりなじみがない者もいた。

まず、生徒たちはiPadを使って竹について調べ始めた。「竹 舞鶴」と検索すると、竹林整備に関する記事が見つかり、京都府には放置竹林が多いことを知った。ここで初めて「放置竹林」という問題の存在に気付いた。

その後、教員の知り合いに竹を活用した活動を行っているIさんがいることを知り、紹介してもらうことになった。7月の探究DAYでは、実際に現地を訪問し、話を聞く機会を得た。

現地を訪れて初めて、放置竹林の問題について具体的に理解することができた。竹林は人の手が入らなくなると急速に増え、周囲の自然環境や景観に悪影響を及ぼすことがある。しかし、この問題はあまり知られておらず、身近な環境問題であるにもかかわらず関心を持つ人が少ないという現状も知ることになった。



紹介してもらった I さんは、竹の活用方法をさまざまに考えている方であり、竹を使ったゴルフボールや新しいスポーツの開発などにも取り組んでいた。また、健常者と障がい者がともに楽しめるスポーツづくりにも挑戦していた。

こうした活動を知る中で、生徒たちは「竹で何かを作れないか」と考えるようになった。放置竹林を資源として活用し、その現状を多くの人に知ってもらうことが必要だと感じたのである。

I さんは竹を使ったプランターを作っており、生徒たちはそれに興味を持った。実際にプランターづくりを体験させてもらうことになった。

活動では、実際に放置竹林から竹を切り出し、プランターのほか、流しそうめん（竹麺）や竹の遊び道具、箸などを制作した。

竹を加工する作業は想像以上に力と時間が必要であった。最初は竹を切る作業から始めたが、野球部の生徒でも苦勞するほど硬く、まっすぐ切ることは容易ではなかった。力の入れ方や角度を工夫しないと割れてしまうため、慎重な作業が求められた。

この経験を通して、生徒たちは自然素材を扱う難しさを実感した。また、プランターの底に穴を開ける作業では、水はけを考えながら位置や大きさを決める必要があり、植物を育てるための工夫が多く含まれていることも理解した。

作業は簡単ではなかったが、ものづくりの楽しさを強く感じる経験となり、生徒たちはこの活動を長く記憶に残る体験として語っていた。

完成したプランターには、プラスチック製品にはない温かみがあり、環境に配慮した素材であるという魅力も感じる事ができた。

その後、生徒たちは自分たちで作ったプランターをどのように活用するかについて話し合った。その結果、母校の小学校で使ってもらえないかという案が出た。

メンバーの一人が自分の母校に連絡を取り、話を聞いてもらえることになった。後日、小学校を訪問し、プランターを制作した経緯や込めた思いについて説明した。

小学校の先生方の了承を得ることができ、12月の探究 DAY にプランターを寄贈することが決まった。

生徒たちは、このプランターを通して年下の子どもたちが自然や環境について楽しみながら学ぶ機会になってほしいと考えている。

最終報告会が近づく頃、生徒たちの関心はさらに次の段階へと向かっていった。ものづくりだけでなく、別の方法で竹を活用できないかという考えが生まれたのである。

I さんの知り合いには、竹を活用して竹炭を作ったり、竹エキスを抽出したりしている人がいることも分かった。竹炭を作る機械を自宅に設置している人もおり、竹エキスを風呂に入れると肩こりに効くとされていることや、竹の香りが虫よけの効果を持つことなども教えてもらった。今後どの方向に活動を進めていくのかについては、まだ模索の段階である。

今回の活動を通して、生徒たちは小学校へプランターを寄贈できたことにより、自分たちより年下の子どもたちに持続可能な開発や自然との共存について学ぶ機会を提供できたと感じており、大きなやりがいを感じていた。

また、地域の方と協力して作業を行ったことで、放置竹林の問題は一人で解決できるものではなく、地域全体で考える必要があることも学んだ。

SDGs の視点も意識して活動しており、こうした身近な取り組みが環境問題の解決につながる

可能性を実感することができた。

一方で、実際に竹を扱う中で、竹は耐久性が低いことや、害虫の発生、管理の手間などの課題もあることが分かった。そのため、防腐処理や加工の工夫など、より長く安全に使用できる方法を考える必要があることも学んだ。

以下、生徒の振り返りより抜粋である。

「この探究を通して、課題を調べるだけでなく、自分たちで行動し、実際に形にすることの大切さを学びました。これからも身近な地域や環境の問題に目を向け、自分にできることを考え、行動していきたいと思います。

【実践例2 スポーツ筋トレ地域（地域の高齢者を対象としたスポーツ教室実施を通して）】

当初は、筋トレやスポーツが好きなメンバーが集まり、一つのグループが形成された。担任が今後の方向性について尋ねた際も、生徒たちは「筋トレが良いと思います」「スポーツが良いと思います」といったように、自分たちの好きな活動を中心に考えていた。

そこで担任は、今年度の2年生の探究学習の目標の一つとして掲げていた「外に出て活動する」という点を話題に挙げた。

「今年は“外に行く”という目標があったよね。」

そう問いかけると、生徒たちは

「外に行きたいです。」

とすぐに答えた。

そこで担任は、「では、外に出て活動するためにはそれに相応しい理由が必要になる。舞鶴にはどのような特徴があるだろうか」と問い返した。

生徒たちは舞鶴の特徴について考え、「高齢者が多い」という点に着目した。そこから、「高齢者 × スポーツ・筋トレ」というテーマで何かできないだろうかという発想が生まれた。さらに、生徒たちは近くで話を聞ける場所がないかを探し、女性向けフィットネス施設であるカーブスの存在に気付いた。そこで実際に訪問し、話を聞いてみることにした。

この時点では、まだ問いも十分に深まっておらず、具体的な計画も決まっていなかった。ただ、生徒たちは「外に出て活動したい」という思いが強く、そのための理由を探しながら行動していた。

突然の訪問であったにもかかわらず、カーブスのスタッフは温かく迎えてくれた。生徒たちは探究学習で「高齢者 × スポーツ・筋トレ」をテーマに活動を考えていることを伝えた。すると、その取り組みに賛同してもらうことができた。

さらに、イベントを実施する際には協力できることや、当日にはスタッフを派遣することも可能であるという前向きな返答をもらうことができた。

生徒たちは、自分たちの活動に地域の人が賛同してくれるとは思っておらず、協力してくれる人ができたことに大きな喜びを感じた。また、自分たちの考えが認められたように感じ、大きな励みとなった。

7月の探究デーでは、イベント会場の候補を探すことと、舞鶴の高齢者の状況について知ることを目的として、高齢者向けの講座を実施している城南会館を訪問し、ヒアリングを行った。

そこで、高齢者向けの健康講座の内容や、施設で配布されているチラシなどを確認することができた。城南会館の担当者も協力的であり、会場として使用できる可能性があるという手応えを得ることができた。

9月初旬には、再びカーブスを訪問し、活動の進捗を報告するとともに、高齢者向けの筋トレやストレッチの方法について教えてもらった。その際、「市役所とつなぐことができるかもしれない」という提案も受けた。

しかし生徒たちの心の中には、「本当にうまくいくのだろうか」という不安もあった。高齢者を対象とした健康イベントを自分たちで実施することができるのか、半信半疑であった。

その後、文化祭準備期間に入ったこともあり、市役所健康づくり課の A さんにつながる事ができたのは 10 月に入ってからであった。A さんは舞鶴共済病院の理学療法士である S さんも紹介してくれた。

生徒たちが「高齢者 × スポーツ・筋トレ」をテーマにイベントを行いたいと伝えると、S さんも快く協力を申し出てくれた。ここから企画は本格的に動き始めた。

顔合わせの後は、A さんと S さんが毎週のように学校に来てくれ、生徒たちと一緒に企画を検討した。高齢者向けの筋トレやストレッチを取り入れたイベントを実施する方向で意見を出し合いながら、企画を具体化していった。

イベントの実施日は 12 月の探究デーに決定した。11 月初旬にはチラシを完成させる必要があり、そのためには企画内容や当日の流れ、会場の使用方法など、多くの事項を決定しなければならなかった。

生徒たちにとって、自分たちで考えた企画を実際に実施する経験は初めてであった。相手の立場に立って考えることの難しさや、企画運営の大変さを実感することになった。

また、チラシ作成や文章作成なども自分たちで行う必要があり、その作業の大変さも経験した。同時に、イベントを成功させなければならないという責任感も強く感じるようになった。

メンバーの 1 人が体調を崩したこともあり、精神的にも時間的にも余裕がない状況が続いた。しかし、A さんや S さんは予定外の時間でも協力してくれ、生徒たちと一緒に準備を進めてくれた。

その支援は心強いものであったが、一方で「ここまで協力してもらっている以上、途中でやめることはできない」というプレッシャーにもつながった。忙しく、負担の大きい時期であったが、生徒たちは最後まで取り組む決意を固めていた。

11 月下旬には、A さんの紹介で京都新聞の記者が取材に訪れた。この取り組みを記事として紹介したいという申し出であった。生徒たちは緊張しながらも取材に応じ、主に代表の生徒が説明を行った。専門的な内容については S さんが補足する形となった。

後日、新聞に掲載された記事を担任が持っていくと、生徒たちは嬉しそうに記事を確認していた。比較的大きく掲載されており、活動の様子や生徒たちの写真も掲載されていた。

イベントの申し込み方法については、QR コードによる予約を想定していたが、高齢者の利用を考慮し、電話予約も併用することにした。学校の事務が電話を受け、生徒が折り返して確認を行う方式で対応した。

電話対応は初めての経験であり、生徒たちは緊張していた。そのため、あらかじめ対応用の原稿を作成し、それを参考にしながら対応した。想定外の質問を受けると戸惑うこともあったが、概ね問題なく対応することができた。

チラシを城南会館に設置してもらったが、当初の申し込みは2～3名程度であった。しかし12月に入ると申し込みが増え、最終的には26名の参加者が集まった。生徒たちはその結果に驚きながらも、大きな達成感を感じていた。

イベント当日に向けて、生徒たちは期末テスト期間を挟みながら準備を進めた。司会原稿の作成、筋力低下のリスクを説明するスライド作成、ストレッチの補助方法の確認、モルックのルール確認など、多くの準備を行った。前日にはリハーサルも実施し、万全の状態で大番を迎えた。



当日は緊張していた生徒もいたが、イベントが始まるとリハーサル通りに進行することができた。高齢者の参加者は楽しそうに体を動かしながらも、自分の体力やバランス能力を真剣に確認していた。

生徒たちは説明や補助を行う中で、専門的な内容を分かりやすく伝える難しさを実感した。

イベント終了後、生徒たちは大きな疲労を感じながらも、言葉では表しにくい達成感を味わっていた。

今回の活動を通して、生徒たちは企画立案から実施までの一連のプロセスを経験することができた。また、地域の大人と協力して活動を進める中で、地域と関わることの意義も学ぶことができた。

一方で、外部の支援が多いほど活動の持続可能性が課題となるという点も見えてきた。今後は再現性をどのように確保するかが学校としての課題である。

以下、生徒の振り返りより抜粋する。

「説明や補助を行う中で、専門的な内容を分かりやすく伝えることの難しさを実感しました。モルックの説明が長くなり、待つ人が多く出てしまったことが反省点です。細かなところまで準備することの大切さを強く感じました。一方で、アンケートでは『勉強になった』『今後につなげたい』という評価をいただき、とても嬉しかったです。この活動を通して、高齢者のけがは誰にでも起こりうる身近な問題であり、予防の大切さを学びました。初めての企画でしたが良い経験となり、自分自身も成長できたと感じています。」



【3年生】

3年生においては、これまで2年間で積み重ねてきた探究活動を自己の進路および将来の生き方と結び付けることを目的とし、「探究をキャリアへつなぐ」ことを軸に年間の取組を展開した。前年度から継続して取り組んでいるプロジェクトも複数存在し、商品開発や販売、地域イベントの企画・実施など、探究活動が実社会での実践へと発展した事例も見られた。探究を学内活動として完結させるのではなく、社会との接続を意識した実践へと昇華させることを重視した。

4月には再起動フェーズとして、2年次までの探究活動を振り返り、自身の問いの変遷や学びの蓄積を整理した。その上でテーマの再検討を行い、総合型選抜等も視野に入れながら、探究経験をどのように進路や将来像と結び付けるのかを確認した。探究を成果として整理するのではなく、「自分は何を大切にし、何を社会で実現したいのか」を再定義する時間とした。

5月から6月初旬にかけては、「私の行動宣言」を起点としたプチ探究を実施した。本活動では、これまでの学びを踏まえ、自身の長所をいかにさらに伸ばしていくか、これまで課題としてきた短所をどのように克服していくか、そして将来のキャリア形成をどのように再確認し具体化していくかという観点から自己を見つめ直した。その上で、自らのテーマに沿った具体的な行動宣言を行い、実際に行動を起こし検証する小規模な探究活動へとつなげた。活動後には発表会を実施し、成果と課題を共有することで、最終探究へ向けた問いの精緻化を図った。

6月から9月にかけては、3年間の集大成となる最終探究を展開した。フィールドワークや外部機関との連携、実践活動および検証・改善を繰り返しながら研究を深化させた。商品開発や販売、地域イベントの実施など、探究活動が実社会での実践へと発展する事例が見られた。また、自身の「好き」や関心を深掘りした探究を通して、総合型選抜等の進路選択へと結び付ける生徒も現れ、探究学習がキャリア形成につながる成果が確認された。

10月には卒業論文発表会を実施し、課題設定の背景、実践内容、検証結果、社会的意義を整理した上で発表を行った。相互評価や対話を通して多面的な視点から研究内容を見直し、論理的に伝える力の育成を図った。

11月には探究活動の総括として研究内容を統合し、卒業論文としてまとめた。成果の整理にとどまらず、探究を通して身に付けた資質・能力を振り返り、自己の成長および進路との接続を再確認する時間とした。3年間の学びを統合し、社会へ踏み出す準備段階として位置付けている。

【実践例1 探究をキャリアへつなぐ】

3年生では、これまで2年間で積み重ねてきた探究活動を自己の進路および将来の生き方へ接続することを目的として、年度当初に「探究をキャリアへつなぐ」取組を実施した。

4月には、これまでの経験や感情の変化を振り返るワークシートを活用し、小学校から現在までの出来事や感情の浮き沈みを整理する人生曲線の作成を行った。生徒は成功体験や挫折経験を可視化することで、自身の価値観や行動特性、興味関心の背景にある要因を言語化し、自己理解を深めた。

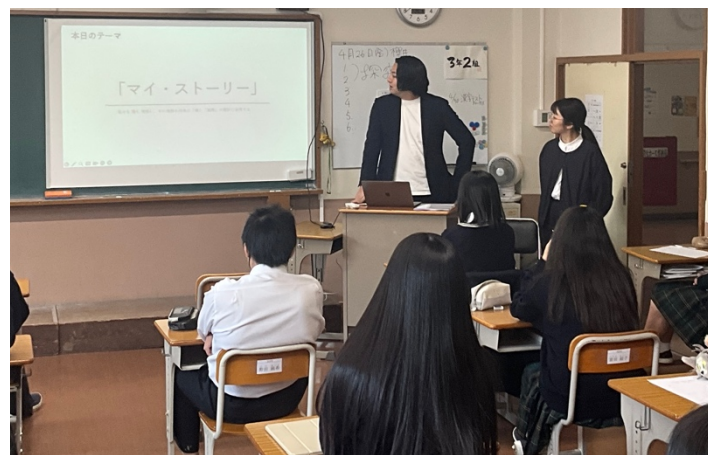
続いて、将来のライフイベントや働き方を長期的視点から考える活動を行い、自身がどのような人生を歩みたいのかを見つめ直す機会を設けた。進学や就職といった目先の選択にとどまらず、社会との関わり方や生き方そのものを考えることで、探究活動とキャリア形成との接続を図った。

さらに4月26日には、福知山市において地域拠点型ブルワリー「CRAFT BANK」を運営する羽星大地氏および上埜妙子氏を招き、講話および対話型セッションを実施した。講話では「マイ・ストーリー」をテーマに、自身の経験を振り返りながら価値観を言語化し、問いを持ち続けることが進路選択や人生設計につながることを示された。学生時代や社会人初期の挫折経験、起業に至る意思決定の過程などの具体的な実体験は、生徒にとって将来を主体的に考える契機となった。

また、講話後の質疑応答では、生徒から働く意味や主体性、挑戦への不安に関する質問が寄せられ、「夢は行動の中で見えてくる」「自分の得意なことを活かしながら周囲に助けを求めることも主体性である」といった助言が示された。実社会で挑戦を続ける大人との対話を通して、生徒は自身の価値観や進路観を見直し、探究活動を自己の生き方と結び付けて捉える姿が見られた。

【実践例2 私の行動宣言から始まるプチ探究】

4月の自己理解活動および外部講師講話を受け、自身の将来像を具体化し、キャリア形成につながる行動を設計することを目的として「私の行動宣言」を作成した。本取組は、これまでの探究活動で培った「問いを立て、行動し、振り返る」サイクルを自己の生き方や進路選択へ接続することをねらいとしている。



進路や将来像を具体的に考える過程において、生徒の中には、自身が目指す職業や役割に対して必要となる経験や視点が十分ではないことに気づく姿が見られた。例えば、保育・教育分野を志向する生徒は、幼い子どもと主体的に関わった経験が少ないことを自己の課題として認識し、理想とする将来像との間にあるギャップを明確化した。

その上で、生徒はインタビュー、参与観察、イベント企画など複数の手法を比較検討し、自身にとって最も有効な方法を選択した。

志望分野に関連する社会課題や地域課題と接続させながら、小規模であっても実践可能なアクション計画を具体化し、実施時期や準備物、振り返り方法までを設計した。

この段階では、結果よりも「どのような原体験を獲得したいのか」「そのために何を行うのか」を明確にすることを重視した。生徒は自らの進路を他者から与えられる選択肢としてではなく、自身の問いに基づき構築するプロジェクトとして捉え直す姿勢を示した。

本取組では、成果や結果を求めることよりも、「どのような経験を通して自己理解を深めたいのか」「将来どのような社会的役割を担いたいのか」を問い続ける過程を重視した。生徒は進路を与えられた選択肢としてではなく、自身の問いから構築していくプロジェクトとして捉え直す姿勢を示した。

本校では、進路実現を「将来どのような人間として社会に関わりたいか」という問いから逆算するプロセスとして位置付けたいと考えている。そのため、不足している経験を自覚し、それを自ら設計し、取りに行くこと自体を学びの中核に据えている。

この取り組みは、探究活動を通して育成してきた主体性・協働性・社会性を、3年次においてキャリア形成へと統合する最終接続フェーズであり、「問いを立てられる生徒」から「問いに基づいて人生を設計できる生徒」への転換を図る取組である。

【実践例3 社会と接続する最終探究フェーズ】

6月以降、生徒は「私の行動宣言」に基づき、最終探究フェーズへと移行した。本フェーズでは、これまでに培ってきた問いの設定力や計画立案力を実社会の中で検証し、他者との関わりを通して学びを深化させることを目的とした。

生徒は自身の関心や将来像を起点に、地域社会の課題や資源と接続しながら実践活動を展開した。活動形態はフィールドワーク、地域イベントの企画運営、商品開発、継続的ボランティア活動など多様であり、生徒自らが社会との接点を設計した点に特徴がある。

環境分野に関心を持つ生徒は、自己理解を通して明確になった将来像と地域特性を接続し、海洋プラスチック問題をテーマに設定した。海岸でのごみ回収活動を行い、それらを活用した体験型ワークショップを企画・実施することで、子どもが制作活動を通して環境問題を考える機会を創出した。課題を一方向的に伝える立場から、他者と共に考える場を設計する立場へと視点が発展している。

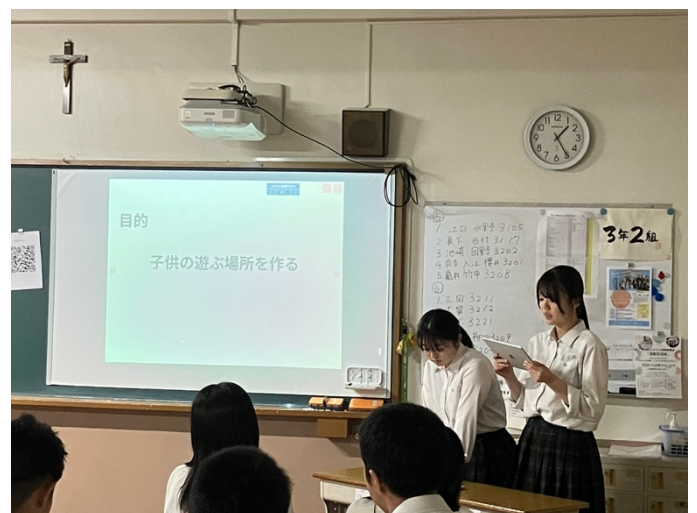
地域資源の活用をテーマとしたグループは、フードロスの課題に着目する中で、舞鶴の特産品である万願寺あまとうに目を向けた。規格や流通の都合により十分に活用されない農産物が存在する現状を知り、「地域の価値ある食材を無駄なく活かす方法はないか」という問いから探究を開始した。栽培や収穫への参加、事業者への聞き取り調査を通して生産現場の実態を理解するとともに、食材の特性や消費者ニーズを踏まえた商品開発に取り組んだ。試作と改善を繰り返す中で、実現可能性や量産性の課題に直面しながらも、計画を修正し協働を深めることで試作品の完成へと至った。



また、栄養・食育分野に関心を持つ生徒は、地域の子ども食堂へ継続的に参加し、食育や居場所づくりの意義を実体験を通して学んだ。大量調理の難しさや運営の工夫を知るとともに、自ら菓子を製作して提供するなど主体的な関わりを継続した。活動を通して「おいしい」という言葉を直接受け取る経験は、食が栄養面のみならず心の支えにもなり得ることを実感する機会となった。

これらの実践に共通して見られたのは、問いを立てる段階にとどまらず、現場に出て他者と協働しながら試行錯誤を重ねる過程である。活動は常に順調に進んだわけではないが、外部からの反応や評価は新たな問いを生み、生徒は計画を修正しながら学びを更新していった。

特に重要なのは、社会からの直接的なフィードバックである。地域住民や子ども、事業者からの感謝や評価は、生徒に「自分は必要とされている」という実感をもたらした。これは単なる達成感では



なく、他者との関わりの中で自己の存在価値を見いだす経験であり、自己有用感の形成へとつながっている。

他者のために行動することが、結果として自分自身の充実感や成長実感へと還元される。この循環は、本校が掲げる教育目標「人と共に生き、人のために役立つ、心豊かな人に」を体現する具体的な姿である。社会への貢献と自己のウェルビーイングが相互に高まり合うことを、生徒は探究の実践を通して体感している。

最終探究フェーズは、単なる成果発表の段階ではなく、3年間の探究学習で育成してきた主体性・協働性・探究性・社会性を統合し、実社会の中で発揮する段階である。ここで得た経験は、進路選択や将来設計にとどまらず、生徒が社会の一員として自らの役割を自覚し、他者とともにより良い社会を築こうとする姿勢へとつながっている。

IX 2 年生「地域未来学 I」実施報告

【2 年生 地域未来学 I】

2 年生においては、「自分の興味関心を起点に、実装しながら社会とつながる」ことを軸に年間の探究活動を展開した。1 年次に培った問いの立て方や対話の基礎を土台とし、具体的な行動を通して社会と接続する段階へと進化させることを目標とした学年である。

4 月から 5 月末にかけては、短期実践型プログラム（チョコプロ）を 2 サイクル実施し、小規模であっても行動し、振り返り、改善する経験を積んだ。一方で、問いの精緻化や社会接続の深さといった課題も明らかとなり、

6 月以降はより長期的かつ実社会と接続したプロジェクト型探究へと移行した。

6 月以降は 9 つのプロジェクトが始動し、高齢者との交流、校内行事の再設計、地域特産品の商品開発、企業との協働、多世代交流型音楽企画、公共空間活性化を目指す対話型ゲーム開発など、多様な実践が展開された。生徒は地域へ出

向き、企業や行政、地域住民との連携を通して実践を重ね、アンケート実施、商品試作、改良、企画再設計など、具体的な行動を伴う探究を進めた。

10 月の中間発表会では、教員だけでなく外部関係者や他学年の生徒からフィードバックを受けた。活動の妥当性や社会的意義、継続性、検証方法について多面的な助言を得ることで、生徒は問いを再設定し、計画を修正し、探究を再度回す経験を積んだ。このプロセスにより、活動は単発の実施から、改善を前提とした継続的取組へと質的転換が図られた。

1 月には最終報告会を開催し、各プロジェクトが背景、実践内容、検証結果、今後の展望を整理して発表した。成果のみならず課題や未達成部分も共有し、探究の過程そのものを振り返る場とした。また、掲示による公開発表を通して、自らの学びを社会に向けて発信する経験を重ねた。

最終報告会は活動の終結を意味するものではない。多くのプロジェクトは 3 年次へと継続する予定であり、2 年次は「社会と接続する経験を積む段階」として位置付けられる。

3 年次では、これらの探究活動を自己のキャリア形成と明確に紐付け、「自分は何を社会で実現したいのか」「そのためどのような進路を選択するのか」という問いへと発展させていく。2 年次で得た実践経験を土台とし、3 年次では探究を自己の将来設計へ統合する段階へと移行する予定である。



【実践例1 地域未来学「舞鶴版 ito」プロジェクト】

(地域課題から始まり、地域実践と社会発信へと展開した探究)

本チームの生徒の一人が、1年次に参加していたゲームゼミの活動を通して、舞鶴西図書館で実施された中学生向けカードゲームイベントにボランティアスタッフとして参加したことが、本プロジェクトの出発点となった。

当日のイベントはカードゲームを通して参加者同士の会話が生まれ、会場は盛り上がりを見せていた。しかし一方で、参加していた中学生は4名にとどまり、生徒は「なぜ図書館に若い世代があまり訪れていないのか」という疑問を抱くこととなった。この経験から、「どうすれば図書館に若い人が集まる場をつくることができるのか」という問いが生まれ、本プロジェクトがスタートした。



そこで生徒たちは、イベントで体験したカードゲーム「ito」に着目した。「ito」は、参加者がそれぞれ与えられた数字カードをもとに、テーマに沿って自分の数字の位置を言語化しながら並べていく協力型ゲームであり、自然と会話が生まれ、初対面の人同士でも交流が生まれやすい特徴を持つ。生徒たちは、このゲームの仕組みを活用することで、若い世代が図書館に来やすい場をつくるのではないかと考えた。

さらに、生徒たちは既存のゲームをそのまま使用するのではなく、舞鶴の地域資源をテーマにしたオリジナルカードゲーム「舞鶴版 ito」の制作に取り組んだ。カードのテーマには「舞鶴の観光地」「舞鶴で食べられる有名店」「舞鶴でデートするなら」「舞鶴のお土産」「舞鶴の海の近さを感じられる」などを設定し、ゲームを通して自然に舞鶴の話題が生まれる仕組みを目指した。地域的话题を共有しながら対話が生まれることで、ゲームそのものが地域交流のきっかけになることを意図したものである。

完成した「舞鶴版 ito」は、まず本校オープンスクールで実践された。1回目のオープンスクールでは来校した中学生を対象にゲームを実施し、アンケートでは「とても楽しかった」と回答した参加者が約7割に達するなど、概ね好意的な結果が得られた。しかし、生徒たちはアンケート結果を分析する中でいくつかの課題にも気付いた。まず、舞鶴のテーマを扱っているものの、参加者の中には舞鶴についてあまり知らない中学生もいることが分かった。

また、ゲーム開始前の場づくりが十分ではなく、初対面同士の参加者が緊張した雰囲気になってしまう場面も見られた。さらに、カードのテーマ数が限られており、話題の幅がやや狭いという点も課題として挙げられた。

そこで生徒たちは、これらの課題を踏まえてゲーム内容の改善に取り組んだ。舞鶴について知らない参加者でも楽しめるよう、ゲーム中に舞鶴に関する情報を調べながら会話できるよう工夫した。また、ゲーム開始前にアイスブレイクを取り入れ、参加者同士がリラックスした雰囲気の中で会話を始められるようにした。さらにテーマのバリエーションを増やすため、オープンスクールに参加した中学生へのアンケートを参考に新しいテーマを追加するなど、参加者の視点を取り入れた改善を行った。

これらの改善を踏まえて、2 回目のオープンスクールでも「舞鶴版 ito」を実施した。その結果、アンケートでは「とても楽しかった」と回答した参加者が 100%となり、1 回目の実践を踏まえた改善の効果が確認された。生徒たちは、参加者の声をもとに内容を改善することで、より多くの人に楽しんでもらえる企画へと発展させることができた。さらに、11 月には舞鶴の図書館で「舞鶴版 ito」を実施した。図書館という地域の公共施設で実施することで、若い世代と図書館をつなぐ場づくりを目指した。このイベントに向けては、舞鶴市内の中学生約 2000 名にチラシを配布し参加を呼びかけた。しかし、実際には中学生の参加者は 0 人という結果となった。一方で、図書館で直接チラシを受け取った大人の参加者は実際にイベントに参加してくれた。この経験から生徒たちは、単に情報を広く届けるだけでは人は動かず、企画者の思いや熱量が直接伝わることの重要性に気付くこととなった。



生徒たちは、本活動を地域の図書館のあり方と結びつけて考えるようになった。舞鶴市では令和 10 年の開館を目指し新図書館の整備が計画されており、生徒たちは自分たちの活動が将来の図書館の姿にもつながるのではないかと考えた。そこで舞鶴市図書館課の山本課長と 2 度の面談の機会を得て、自分たちの活動や考えを直接提案する機会を持った。

1 回目の面談では、新図書館の市民交流エリアにボードゲームコーナーを設置し、その中に「舞鶴版 ito」を置くことを提案した。生徒たちは、ゲームを通して自然な会話が生まれる経験を踏まえ、図書館が本を読むだけの場所ではなく、人と人が交流する場所として機能する可能性について説明した。また、図書館のレイアウトをより親しみやすいポップな空間にすることや、カフェを併設することで多様な世代が集まる場所になるのではないかとという提案も行った。



2 回目は、新図書館に関するワークショップだった。「本館や分館でどのように過ごしたいか」というテーマについて意見を出した。生徒たちからは、快適に過ごせる空調設備の充実やパソコンルームの設置など学習環境に関する提案のほか、動物と触れ合える場所など従来の図書館のイメージにとらわれない新しい空間づくりのアイデアも出された。



生徒たちが思い描く未来は、幅広い世代が対話やボードゲームを通じて一つの場所で交流する新しい文化をつくることである。図書館は「静かにする場所」という従来のイメージだけではなく、人が集い、交流し、新しい関係が生まれる場としての可能性を持つ施設であるという考えに至った。

本プロジェクトは校内の活動にとどまらず、外部の探究発表の場にも挑戦した。生徒たちは全国高校生マイプロジェクトアワードの京都サミットに出場し、自分たちの取組を発表した。地域の図書館という公共施設をテーマに、カードゲームを活用して若い世代と地域をつなぐ試みは地域課題への取組として評価され、上位大会であるアドバンスドへの出場を果たした。参加した多くのプロジェクトの中で上位6プロジェクトの一つとして選出されたが、全国大会への出場にはあと一歩届かなかった。

この経験は生徒にとって大きな学びとなった。マイプロジェクトの発表の場では、他校の生徒やファシリテーターとして関わる社会人との対話を通して、自分たちの活動を多様な視点から見つめ直すことができた。他校生の地域プロジェクトを知るとともに、大人からの問いかけや助言を受けることで、自分たちの探究をより広い視点で捉え直す契機となった。

地域の課題に対する問いから出発し、ゲームという形で地域資源を再編集し、学校や地域での実践、行政との対話、さらには外部発表の場へと広がっていった。生徒たちは試行錯誤を重ねながら活動を進める中で、地域社会の中で人と人とのつながりを生み出す活動の意義を実感するとともに、自ら行動しながら学びを深めていった。

【実践例2 多世代交流を目的とした探究活動「合唱を通して地域の人と繋がろうプロジェクト」】

このプロジェクトは、生徒の関心と進路を掛け合わせてできたテーマであり、生徒の関心が主軸にある探究は、学習内容を自分自身の生活や社会と結び付けて捉える契機となる。その結果、生徒は学習を単なる知識の習得としてではなく、自分の疑問や関心を深めるための手段として位置づけるようになる。このような経験を通して、生徒は学び続ける姿勢や自らの課題を見出して取り組む態度を育む態度を形成していく。

ここではプロジェクトを通して、実際に力をつけ、成長した生徒達の事例を紹介する。

元々合唱が好きで、合唱を使って何かに取り組みたい生徒と、歌うことが好きで将来の夢が保育士の生徒がチームを組んで、活動が始動した。合唱と子どもというキーワードを組み合わせるテーマを考える中で、地域内の世代間交流が薄れてきていることに課題意識を持つようになった。そこで、生徒達が立ち上げたのが「多世代型の合唱プロジェクト」である。子どもから高齢者まで幅広い世代が気軽に出会い、日常的に多世代が関われる地域をつくりたいという思いが、これからこのプロジェクトを進める上での支えとなっていくのである。

まず相談したのは、学校近くにある公民館の館長だ。多世代交流企画を実施できないか交渉しに行ったが、その際思いを十分に伝えられず、「何を実現したいのか伝わりにくい」と指摘を受けた。この経験は、企画は“何をするか”だけでなく、“なぜその取り組みをしたいのか”という思いを明確にすることが大切であると気づく大きな転機となった。企画を持ち帰り再度練り直した結果、多世代交流を目的としたクリスマス会を実施するのはどうか、という考えにまとまり、再度公民館へ提案した際には内容を評価してもらい、広報活動への協力も得られた。

さらに、館長からの提案で、公民館主催の敬老会に参加できるようになった。これは絶好の広報機会である。生徒らは合唱の魅力を伝えるため、合唱部に協力を求め、当日は複数名での参加が実現した。選曲は世代を問わず親しみやすいものにし、全員で歌う「ふるさと」では歌詞カードも用意した。手拍子や手話で参加して下さる姿もあり、会場が一体となる瞬間を感じられた。イベント後のアンケートでは、「また参加したい」という声が多く寄せられ、工夫が届いたことを実感した一方、「参加したいが移動が難しい」という課題も見え、集まりやすさの重要性にも気づく機会となった。



クリスマス会に向けては、幼稚園の先生へのヒアリングがプログラム内容を見直すきっかけに繋がった。聞き取りから「子どもは制作が好き」という情報を得たことで、オリジナルベル作りを追加するという改善が生まれた。この気づきは、相手の立場に寄り添うことの大切さを教えてくれた。また、多動症の子どもが参加することが分かり、どんな特性をもつ人でも安心して参加できるよう、レクリエーションを短時間でできる形に調整するなど、企画全体をより柔軟で思いやりのあるものへと見直す原因となった。

当日のクリスマス会には、地域の子どもたちが所属する合唱チーム「子どもコーラス」のメンバーや学童保育の児童、その支援員の方、そして保護者の方々が参加して下さり、生徒らの目指す「多世代交流」に一步近づく体験となった。プログラム内容も改善した



甲斐があり、ベルの制作は多いに盛り上がり、コミュニケーションが生まれたことで、後の合唱でも参加者たちが積極的に関わり合い、楽しむ姿が見受けられた。一方で、参加者の多くが「子どもコーラス」のメンバーで、生徒自身がそのチームに所属していたこともあり、既に関係性のある人たちであった。地域住民などの新規参加者は限られており、多世代交流を広く促進するという点では課題が残った。この要因として、広報活動が学校関係者や知人を中心とした範囲にとどまり、地域全体への周知が十分でなかったことが考えられる。生徒たちはイベントを振り返り、今後は地域施設へのポスター掲示や SNS の活用、地域団体との連携などを通して広報活動の範囲を広げ、新規参加者が参加しやすい環境づくりを行うことが重要であるのではないかと発言している。企画を形にして実現できたことへの達成感と、本当に実現したかった「多世代交流」とは何であったかを改めて考えさせられたこの経験は、生徒達の成長へと確実に繋がっている。

驚くべきは、外部コンテストである「マイプロジェクトアワード」に参加したいと、生徒自ら意思表示した。行動することを重視するマイプロジェクトアワードへのエントリーは、これまで十分に行動してきた、という自負の表れでもある。結果的に、無事に書類選考を突破し、地域サ

ミットへの出場を果たした。外部コンテストへの参加は、高いレベルで探究に取り組んでいる同年代の高校生たちに出会う機会、生徒らの刺激となる。実際出場を経て、「次はもっとこんなことがしたい」「こうすればできるのではないか」といったことを考え始めた。

対話を重ね、工夫を加え、時には悩みながら企画を形にしていく過程は決して簡単ではなかったが、実践を通して誰かの喜びにつながる瞬間に立ち会えたことは、生徒たちの大きな励みとなった。この経験は、誰にとっても居心地のよい場づくりを考える姿勢や、多様な人々に寄り添う視点を育んでくれた。プロジェクト活動の1年の振り返り際には、「好きが原動力になること」「挑戦することの大切さ」を学んだ、「来年度も継続したい」という言葉が生徒たちから出てきた。関心を軸とした探究は、生徒の主体性を引き出し、自ら学びを深めていくのだと、本プロジェクトは改めて気づかせてくれた。

【実践例3 「じいちゃん・ばあちゃんのリフレッシュの場を作りたい！」

高齢者の日常にちょっとした幸せを届けるプロジェクト】

テーマ設定の背景

本プロジェクトのきっかけは、生徒の家族の経験にある。生徒の祖父は高齢者施設に入所しており、生徒は以前から定期的に面会に訪れていた。しかし、感染症の流行により施設での面会が制限され、しばらくの間直接会うことができなくなった。

さらに、施設内でも外出や入所者同士の交流が制限される状況が続き、祖父は後に「人と出会えないことや外に出られないことがとても辛かった」と振り返っている。

この経験を通して、生徒たちは高齢者にとって人と交流する機会や外出の機会が、心身の健康や生活の充実にとって重要であることに気づいた。

そこで、高齢者が気軽に参加でき、交流しながら心身をリフレッシュできる場を作ることではできないかと考え、本プロジェクトを開始した。

また、この活動を通して、高齢者の生活や地域社会の課題について理解を深めることも目標とした。

活動内容

始めに、生徒の経験から施設を利用する高齢者の方を対象に交流の場を作ることではできないか、と考え介護老人保健施設にてヒアリングを実施した。職員の方からは生徒達の取組に関して好意的に受け取っていただき、夏休み期間に施設内で開催される夏祭りで高校生が企画するブースを1つ担当してみないか、という提案を受けた。

生徒達は夏祭りに向けて、企画を考えることになる。

当初、生徒達は簡単な体操や風船バレーのようなレクリエーションを検討していたのだが、職員の方からの聞き取りによって、入居者の多くは車いすを利用していることや、認知症が進んでいることなどが分かり、体を使った内容は難しいという結論に至った。そのため再度企画を練り直すことになるのだが、普段施設の外に出られない高齢者の方々がどうすれば非日常を体験でき

るか、また夏祭りの雰囲気味わってもらえるかについてアイデアを出し合った。そして生まれた企画が「夏を味わえるフォトブース」である。

生徒達は、手始めにフォトブースの背景に設置する壁紙の作成に取り掛かった。面白かったのは、クラスメイトを巻き込んだことである。画用紙を貼り合わせてできた巨大な壁紙に、手のひらに絵の具を塗った1クラス分の生徒達がペタペタ手を押し付ける。そうして出来上がったのは、夜空に舞うカラフルな大輪、花火であった。また手作りのフォトフレームや小道具も用意し、本番に備えた。

そして迎えたイベント当日。設置されたブースの背景にある大きな花火を見て、感嘆の声を上げる高齢者の方々やその家族。合わせて施設から貸し出してもらった法被や浴衣も身にまとってもらい記念撮影。入口前に設置させていただいたこともあり、終始賑わいを見せていた。生徒たちも始めは緊張からか表情が高く、上手くコミュニケーションをとれていない様子であったが、徐々にこわばりはなくなり、自らフォトブースにお客さんを呼び込んだり、撮影の際にお似合いですね、と声をかけたりと積極的な動きを見せるようになった。



イベントは成功に終わり、職員の方からも喜んでいただき、生徒たちにとって実りある時間となった。イベント後には職員の方対象にアンケート調査を実施し、高齢者にリフレッシュしてもらうためにはどんなことをすべきか、考えるための参考とした。

高齢者施設での体験の後、生徒達は次に「0から自分たちで企画し、高齢者向けに実施すること」を目標に動き始めた。前回のアンケートの結果から「お年寄りには体を動かすこと」「若者と話をすること」がリフレッシュの機会になるのではないかと考えた。

そこで今度は、ある程度体を動かすことのできる高齢者を対象にするため。デイサービスに通うお年寄りに着目した。

まずは、デイサービスの利用者が普段どのように過ごしているのか、受け入れ先に見学へ伺った。職員の方から普段のお年寄りの過ごし方やどういった内容が喜ばれそうか伺い、最終的に大きな作品をみんなで作る、という内容で企画を立てることになった。また、見学に伺った際、お年寄りの方たちから「高校生活の話も聞きたい」という、リクエストを受けたため、企画を「高校生活紹介」と「作品作り」の2部制で行うことにした。

イベントにデイサービスに通う複数の高齢者が参加し、「楽しかった」「久しぶりにたくさん話せた」「若い人からエネルギーをもらった」などの感想が聞かれた。みんなで一緒に作ったちぎり絵の大きな作品は、色とりどりで個性ある形の折り紙たちが重なり合って、とても魅力あるものに仕上がっており、高校生たちを含め、参加した全員が喜びを分かち合った。



この体験は生徒たちにとっても、地域の方々と直接交流することで、高齢者の生活や気持ちをより身近に感じる機会となった。また、活動を通して、高齢者にとって人と交流する機会や外出のきっかけとなる場の重要性を実感することができた。

課題と展望

一方で、今回は一つの場所に限って行ったため、その他の施設やコミュニティへの連携体制はまだ取れていないことや、継続的に活動を行うための仕組みづくりなど、いくつかの課題も見えてきた。

今後は、地域の施設や団体と連携することで、より多くの高齢者が参加できる場づくりを目指したい。また、一度きりのイベントではなく、継続的に交流できる活動を発展させていくことが今後の課題である。

まとめ

本プロジェクトを通して、生徒達は地域社会の課題について考え、実際に行動する経験を得ることができた。高齢者との交流は、生徒にとっても多くの学びや気づきをもたらした。今後も地域とのつながりを大切にしながら、誰もが安心して過ごせる地域づくりについて考えていきたい。



【実践例 4 地域未来 BINGO プロジェクト（試行錯誤を通じた再設計と社会実装）】

実践事例として、生徒が主体となって企画・運営を行った「BINGO プロジェクト」の取組を紹介する。本プロジェクトは、生徒が自ら考えた企画を社会の中で実際に実装する経験を通して、地域との関わりや多様な主体との協働の重要性を学ぶことを目的として実施されたものである。

また、本取組は活動の過程で生じた課題や失敗を出発点として企画を再設計し、より実現可能な形へと改善していく探究の学習プロセスを具体的に示す実践でもある。

当初、生徒たちは「ビンゴ大会を開催すれば人が集まり、イベントとして盛り上がるのではないか」という発想から企画を立案した。まずは学校内での実施を想定し、10月中旬に高校生のみを対象としたビンゴ大会を開催する計画を立てた。景品を用意することで参加意欲を高めることを考え、景品購入費を確保するために参加費を徴収する設計としていた。

しかし、参加者のニーズ調査や広報方法の検討が十分ではなかったことに加え、参加費を伴うイベントの価値が十分に伝わらなかったこともあり、参加希望者が集まらず、結果として参加者は0名であった。この経験は、生徒たちにとって「人を集めることの難しさ」や「企画設計の重要性」を実感する契機となった。

この結果を受け、生徒たちは企画を見直すために外部の事例から学ぶことを試みた。まず、近隣の福知山公立大学の学園祭でビンゴ大会が開催されることを知り、実際に見学を行った。イベント当日の運営方法や参加者の様子を観察するとともに、学園祭の実行委員長にインタビューを行い、企画の工夫や集客方法について話を聞いた。

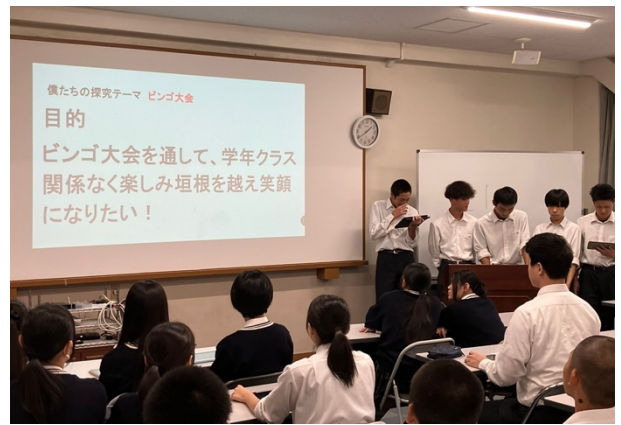
また、龍谷大学の学生とオンラインでの壁打ちを行い、企画の課題や改善の方向性について助言を受けた。

外部の事例研究や対話を通して、生徒たちはイベントを成立させるためには企画内容だけでなく、参加者の視点、広報の方法、開催場所や時期など複数の要素を総合的に設計する必要があることを学んだ。

これらの学びを踏まえ、生徒たちは企画の方向性を再検討した。その結果、学校内で単独のイベントとして実施するのではなく、本校で初めて開催されるクリスマスマーケットの企画と連動させることで、多くの来場者が参加できる環境を整えることを考えた。

来場者が集まるイベントと組み合わせることで、より多くの人が気軽に参加できる企画になると考えたのである。一方で、参加費を徴収する設計では参加のハードルが高くなる可能性があると考え、参加費を無料とする方針へ変更した。その結果、景品を準備するための資金が必要となったため、生徒たちは校内の教員に協力を呼びかけ、寄付を募ることで約8000円の資金を集めた。

また、地域との関わりを広げるため、地元企業である株式会社ウッディーハウスに協力を依頼し、地域と連携したイベントとして実施する体制を整えた。こうした資金調達や地域への協力依頼の過程も、生徒にとっては社会の中で活動を実現するための重要な学習経験となった。



こうしてクリスマスマーケットと連動した形でビンゴ大会を実施する準備を進め、生徒たちは企画運営や役割分担を行いながら当日の実施に臨んだ。

当日はビンゴカードを 300 枚準備していたが、配布開始後まもなくすべてのカードがなくなり、多くの来場者が参加するイベントとなった。また、企画段階からオンラインで伴走してくれていた龍谷大学の学生も当日会場に応援に駆けつけ、生徒たちの活動を見守った。



大学生との継続的な対話を通して企画を改善してきた経験が、生徒が自信を持って主体的に運営に取り組む姿につながっており、生徒たちが生き生きとした表情でイベントを進める様子が印象的であった。

最終発表において生徒たちは、「多くの方と関わることでビンゴ大会を成功させることができた」と振り返っている。

本プロジェクトを通して、生徒たちはイベントを実現するためには企画そのものだけでなく、協力者との関係づくり、資金調達、広報、役割分担など多くの要素が必要であることを実感した。

また、大学生や地域企業との対話を通して企画を改善しながら実装していく経験を得ることができた。

さらに、生徒たちは今回の経験を踏まえ、イベントを通して人と人とのつながりを生み出すことを今後の課題として設定している。ビンゴ大会を単なるイベントとして終わらせるのではなく、人と人が出会い交流する場として発展させていくことを目指している。

その具体的な目標の一つとして、将来的には舞鶴赤れんがクリスマスマーケットなど地域イベントの中で実施することも視野に入れている。

本プロジェクトは、参加者 0 名という経験を出発点とし、外部の事例から学びながら企画を再設計し、社会の中で実装した取組である。生徒たちは試行錯誤を通して、社会の中で活動を実現するためには多様な主体との関わりが不可欠であることを学んだ。本実践は、探究活動において「失敗から学び、外部と連携しながら改善し実装する」という学習プロセスを具体的に示す事例となっている。

【実践例 5 地域性を表現する帽子制作プロジェクトの探究実践】

本実践は、舞鶴市の地域性を表現した帽子の制作を通して、デザイン開発と商品化に挑戦した探究活動である。プロジェクト名は「NOVA」と名付けられ、舞鶴を象徴する鶴をモチーフにした帽子を制作することを目標として活動が行われた。プロジェクトメンバーは全員が野球部に所属する生徒であり、日常生活の中で感じていた課題や関心を出発点として探究が展開された。

本プロジェクトの出発点は、生徒自身の生活に根ざした問題意識であった。メンバーは全員が野球部に所属しており、普段から坊主頭で生活している。そのため、日差しの強い季節には帽子

を被る必要性を強く感じていた。また、修学旅行の際に自分たちの帽子を被っていけたら面白いのではないかという話題が生徒の間で生まれ、「どうせなら自分たちのオリジナルの帽子を作りたい」という発想へと発展した。このように、生徒の生活の中から生まれた関心が、本プロジェクトの探究テーマとなった。

さらに生徒たちは、単なるオリジナル商品ではなく、舞鶴らしさを表現する帽子を作りたいと考えた。そこで舞鶴市の象徴である「鶴」をモチーフに取り入れ、地域性を表現するデザインの検討を行った。また、プロジェクト名として「NOVA」という名称を採用した。NOVAには「新しい星」という意味があり、本校名である日星高校の「星」とも重ね合わせることで、学校と地域の両方を象徴する意味を持たせた。

活動の初期段階では、帽子の形状や種類について調査を行い、どのような帽子が実用性とデザイン性の両方を満たすかを検討した。生徒たちは様々な帽子の種類を調べたうえで候補を絞り込み、色やロゴのアイデアを出し合いながら複数のデザイン案を作成した。また、地域性を表現するため、舞鶴の名前や方言などをデザインに取り入れる可能性についても検討を行った。さらに実際の帽子の形状や素材を確認するため、店舗を訪問し、帽子の種類や特徴について観察を行った。

デザイン制作の過程では、多くの試作案が生まれたが、そのすべてが採用されたわけではなかった。舞鶴の頭文字を使ったロゴや鶴のイラストを用いたデザインなど様々な案が検討されたが、見た目の印象や商品として成立するかという観点から多くの案がボツとなった。この試行錯誤の過程を通して、生徒たちはデザインを形にすることの難しさを実感することとなった。

その後、生徒たちは地域企業である三葉商事を訪問し、帽子制作についての相談を行った。三葉商事は衣料品やユニフォームなどへの刺繍加工を行う企業であり、生徒たちは帽子の製造工程や刺繍加工の方法、制作費用の日安などについて説明を受けた。企業の方との対話を通して、生徒たちはデザインだけでなく、製造コストや素材、刺繍の色やサイズなど、商品化のために考えるべき多くの要素があることを学んだ。

こうした試行錯誤を経て、舞鶴を象徴する鶴のモチーフと「NOVA」のロゴを組み合わせた帽子デザインが完成した。配色はピンクと黒を基調とし、刺繍のデザインが遠くからでも見やすいよう工夫された。また、帽子の背面にはメッシュ素材を採用することで通気性を確保し、被った際に蒸れにくい構造とした。さらにツバの硬さにも配慮し、形が崩れにくい実用的な帽子となるよう設計された。こうした工夫により、見た目のデザインだけでなく、実際に使用する際の快適性も考慮された帽子が完成した。

完成した帽子については、約 2500 円程度での販売を想定し、まずは身近な友人や知人を中心に購入希望者を募る活動を行った。購入人数が増えることで製造単価を下げられる可能性もあることから、生徒たちは周囲への宣伝活動にも取り組んだ。友人に直接声をかけたり、SNS のやり取りを通して販売を試みたりするなど、実際の販売活動を経験する機会となった。最終的には 25 名 1980 円で販売した。



一方で本プロジェクトを通して課題も明らかになった。生徒たちは活動を振り返る中で、「商品を作るだけでなく、それを買ってもらうためのプレゼンテーション力が不足していた」と感じ

ており、商品の魅力を伝えることの難しさを実感した。また、見た目のデザインだけでなく、実際に使う人の視点を考えることの重要性についても理解を深めることとなった。

本実践を通して、生徒たちはものづくりの楽しさと難しさの両方を経験した。自分たちのアイデアを形にする過程で、デザイン、素材、価格、販売方法など多くの要素を総合的に考える必要があることを学んだのである。また、地域企業との対話を通して、商品が社会の中でどのように作られ、流通していくのかを具体的に理解する機会にもなった。

今後、生徒たちは今回の経験をもとに、さらにデザイン性と使いやすさを意識したものづくりに挑戦していきたいと考えている。帽子制作だけでなく、パーカーなどの衣類制作にも挑戦し、将来的には自分たちのブランドを立ち上げることも視野に入れている。本プロジェクトは、生徒の生活の中から生まれた関心を出発点としながら、地域性を取り入れた商品開発へと発展した探究活動の一例であり、生徒が主体的に社会と関わる学びの可能性を示す実践であった。

【実践例 6 規格外万願寺あまとうを活用したスイーツ開発の探究】

本プロジェクトは、舞鶴の特産品である万願寺あまとうに着目し、規格外野菜の活用方法を探究することを目的として実施したものである。舞鶴地域では万願寺あまとうの生産が盛んであり、地域ブランドとして広く知られている。しかし農産物には形や大きさなどの出荷基準があり、規格に合わないものは市場に出荷されず、結果として廃棄される場合もある。こうした規格外野菜の存在はフードロスの一因となっており、地域の農業においても課題の一つとなっている。

本プロジェクトは、メンバーの1人がお菓子作りに興味を持っていたことをきっかけに始まった。市役所を訪れた際、万願寺あまとうのフードロスが多いという話を聞き、「規格外の万願寺あまとうを活用する方法はないか」という問いを立てた。そして、その活用方法の一つとして、万願寺あまとうを使ったスイーツを開発することを目標とした。

まずは試作として、万願寺あまとうを使用したシフォンケーキやカップケーキを作った。万願寺あまとうを細かく刻んで生地混ぜ込むことで、野菜の風味を残しながらスイーツとして食べやすくすることを試みた。完成した試作品は教員に試食してもらい、味や食感について意見をもらった。試食の結果、万願寺あまとうの風味は特徴的である一方で、味のバランスや見た目の色合いなどに改善の余地があることが分かった。

次に、万願寺あまとうの生産について理解を深めるため、生産者である岡安農園を訪問した。実際に栽培されている様子を見学し、農家の方から話を聞くことで、万願寺あまとうがどのように育てられているのかを知るとともに、形や大きさが少し違うだけで規格外となる現状を知ることができた。この経験は、フードロスの問題をより具体的に理解する機会となった。

また、地域で農産物がどのように販売されているのかを知るため、赤れんがファーマーズマーケットを訪れ、地域の農産物や加工品の販売の様子を調査した。実際の販売の場を観察することで、地域食材を活用した商品づくりの可能性や、地域の農産物がどのように消費者に届けられているのかについて考える機会となった。

またそのファーマーズマーケットで試作品を試食してもらい、の改良のためにアンケート調査を実施し、味、風味、食感、改善点などについて意見を集めた。

アンケート結果では、「味が好き」と回答した人が94%、「風味がちょうどよい」と回答した人が79%であり、全体として好意的な評価を得ることができた。また食感についても「ちょうどよい」と回答した人が98%と高い評価となった



一方で改善点として、「見た目の緑色をもう少し出した方がよい」という意見や、「万願寺あまとうが好きな人にはやや風味が薄い」「苦手な人には少し強い」といった意見もあり、味のバランスや見た目の工夫が今後の課題として明らかになった。

こうした意見を踏まえ、さらに試作を重ね、ベーグル、ドーナツ、クッキー、マドレーヌなど、さまざまな種類のスイーツづくりにも挑戦した。食材の使い方や加工方法を変えることで、万願寺あまとうの風味を生かしながら食べやすい商品を模索した。

本プロジェクトを通して、生徒たちは舞鶴の特産品である万願寺あまとうについて理解を深めるとともに、規格外野菜の活用というフードロスの問題について考える機会を得ることができた。また、試作・試食・アンケート・改良という一連のプロセスを経験することで、商品開発には味だけでなく見た目や食感、消費者の好みなど多くの要素が関係することを学んだ。

今後は、今回のアンケート結果をもとにレシピの改良を進めるとともに、ラスクなど新しい商品の開発にも挑戦し、万願寺あまとうの魅力を生かしたスイーツの可能性をさらに探究していきたいと考えている。

本活動は、地域の特産品を活用した商品開発を通して、フードロス問題や地域資源の価値について主体的に考える学びの機会となった。

【実践例7 舞鶴茶の魅力発信を目指したスイーツ開発の探究実践】

本実践は、地域資源である舞鶴茶の魅力を発信することを目的として、生徒が主体となってスイーツ開発に挑戦した探究活動である。京都府舞鶴市は由良川流域の自然環境を活かした茶葉の産地として知られ、舞鶴茶は全国茶品評会において高い評価を受けるなど品質の高さが認められている。しかし、宇治茶などと比較すると全国的な認知度は必ずしも高いとは言えず、その魅力が十分に知られていないという課題がある。そこで生徒たちは「舞鶴茶の魅力をより多くの人に知ってもらうためにはどうすればよいか」という問いを立て、舞鶴茶を活用したスイーツ開発を探究テーマとして設定した。

探究活動の初期段階では、舞鶴市松尾寺駅前にある日本茶カフェ「流々亭」を訪問し、舞鶴茶の特徴や活用方法についてヒアリングを行った。流々亭は大正期の駅舎を活用した日本茶専門カ

フェであり、舞鶴産の煎茶や両丹茶を使った飲み物やスイーツを提供するなど、地域のお茶文化を発信する拠点となっている。この訪問は、前年に本校の授業において舞鶴茶について調査した生徒が同店を訪問していたことを教員から紹介されたことがきっかけであった。生徒たちは先輩の探究活動を参考にしながら、地域の専門店を訪問し舞鶴茶の魅力や活用方法について直接話を聞く機会を得た。

ヒアリングを通して、生徒たちは舞鶴茶の香りや旨味の特徴、またスイーツとの相性について多くの示唆を得た。そこで生徒たちは舞鶴茶を使ったチョコレートの商品開発に挑戦することを最初の目標として設定した。試作ではホワイトチョコレートと抹茶を組み合わせた菓子の制作を試みたが、ホワイトチョコレートの甘味が強く抹茶の風味が十分に活かされないなど、想定した味わいにならないという課題が生じた。また、地域事業者との協働による商品化についても調整が難しく、活動は一時的に停滞する状況となった。この経験を通して、生徒たちは商品開発の難しさや地域と連携した活動の現実的な課題を実感することとなった。

こうした状況の中で、教員からの提案として舞鶴市内の飲食店「アメイロ・ビストロ・アルル」に相談してみることを勧めた。アルルは、本校の先輩の探究活動をきっかけとして誕生したスイーツ「ズルいいプリン」を製造・販売している店舗である。このプリンは文化祭のみの企画商品ではなく、店舗での通常販売に加え、インターネット通販でも購入できる商品として展開されている。生徒たちはそのプリンの存在自体は以前から知っていたものの、それが本校の先輩の探究活動をきっかけとして開発された商品であることは、この時点まで知らなかった。調査を進める中でその経緯を知り、自分たちの学校の中に地域と連携し実際の商品として社会に流通する成果を生み出した探究の事例が存在していたことに驚きを示した。

この出来事は、生徒にとって大きな気付きとなった。身近に存在する商品が、実は先輩の探究活動から生まれたものであると知ったことで、「自分たちの探究も社会につながる可能性がある」という新たな視点が生まれたのである。こうした先行事例の存在は、停滞していた探究活動を再構築する契機となり、生徒たちは舞鶴茶を活用した抹茶プリンの開発という新たな可能性について検討する方向へと探究を展開させていった。

本実践の特徴は、地域資源を活用した探究活動であると同時に、学校内に蓄積された過去の生徒の探究実践が後輩の学びに生かされた点にある。流々亭との接点も、アルルとのつながりも、いずれも先輩の探究活動を教員が紹介したことを契機として後輩の探究へとつながったものであった。また、生徒にとっては既に社会で流通している商品が先輩の探究から生まれたものであると知ることが、探究活動への意欲を高める要因となった。

本実践は地域資源を活用した商品開発の試みであると同時に、学校内に蓄積された探究の実践が世代を越えて影響を与え、地域社会へとつながっていく過程を示す事例であった。先輩の探究が後輩の探究の出発点となり、さらに地域との新たな関係を生み出していくという循環は、探究学習が学校文化として定着していく可能性を示すものとして大きな意義を持つものである。

【実践例 8 実践報告高校生同士の交流を目的とした球技大会の企画と実践】

本プロジェクトは、舞鶴市内の高校生同士の交流の場を創出することを目的として企画された取り組みである。舞鶴市には複数の高等学校および高等教育機関が存在するが、学校の枠を越え

て高校生同士が交流する機会は多くない。部活動の大会などを除けば、他校の生徒と日常的に関わる機会は限られており、同じ地域で学び生活している高校生同士であっても、互いの学校の生徒と関係を築く機会は多くない状況がある。

そこで生徒たちは、「舞鶴の高校生同士が交流し、友情を深める場をどのようにつくることができるか」という問いを設定した。その解決方法として、生徒たちはスポーツイベント、特に球技大会の開催を企画した。スポーツは初対面であっても自然にコミュニケーションが生まれやすく、楽しみながら交流することができると考えたためである。

また、競技経験の差によって参加のしやすさが左右されないようにするため、本大会では比較的参加しやすい種目を選定した。具体的には、キックベース、ソフトバレー、ボッチャの三種目を設定した。特にボッチャは、年齢や運動経験に関係なく楽しめる競技であり、交流を目的としたイベントに適していると考えた。

大会の企画・運営にあたっては、メンバー内で役割分担を行った。キックベース、ソフトバレー、ボッチャそれぞれの競技に担当者を配置し、ルールの設定や進行方法の検討などを行った。また、運営を担当する生徒はその競技には参加しない形を取り、円滑な大会運営を目指した。

当初の計画では、西舞鶴高校、東舞鶴高校、そして舞鶴工業高等専門学校の学生にも参加を呼びかけ、舞鶴市内の学校の枠を越えた交流イベントとして実施することを目標としていた。そのため、生徒たちは参加者を集めるために友人への声掛けを行うとともに、SNS（Instagram）での呼びかけやポスターの作成などを行い、大会の広報を行った。

大会は12月22日に体育館を会場として開催された。しかし、当初予定していた他校の参加を実現することはできず、結果として日星高校の生徒のみが参加する形となった。参加人数は20名であり、規模としては当初想定していたものより小さな大会となった。

それでも大会自体は予定通り実施することができ、参加した生徒からは「とても楽しかった」「普段あまり関わりのない生徒と話すきっかけになった」といった声が聞かれた。スポーツを通して自然なコミュニケーションが生まれ、生徒同士の交流が深まったことは、本活動の成果の一つである。

一方で、生徒たちは大会終了後の振り返りの中でいくつかの課題を整理した。まず、参加人数が20名と少なく、大会の規模が小さくなってしまった点である。また、競技ルールの細部が十分に整理されていなかったため、試合の進行の中で調整が必要になる場面もあった。

さらに、生徒たちはその原因として「宣伝不足」を挙げた。球技大会の内容を考えることに意識が集中するあまり、参加者を集めるための広報活動が十分ではなかったという反省が生まれた。また、当初の目的であった他校の生徒を招くという点についても、各学校の試験期間や部活動、学校行事などの日程が異なり、複数校の生徒が参加できる日程を調整することが難しいという課題が明らかになった。

この経験から、生徒主体の活動だけで地域の高校生や高専生を広く集めることには一定の限界があることが分かった。高校生同士の交流を継続的に実現するためには、生徒個人の努力だけでなく、学校間の連携や情報共有の仕組みなど、一定の制度的な枠組みが必要であることが示唆された。

一方で、そのような仕組みを整えるためには、教員や地域コーディネーターが裏側で学校間の調整を行う必要がある可能性も考えられる。しかし、その場合、生徒主体の活動としての自主性

が弱まり、活動の主導権が大人側に移ってしまうという課題も生じる。すなわち、生徒の主体性を尊重しながら、どこまで大人が支援すべきかという点は、本プロジェクトを通して浮かび上がった重要な教育的課題である。

当初、生徒たちは本プロジェクトを3年次の探究活動でも継続し、より規模の大きな交流イベントへと発展させることを構想していた。しかし、今回の活動を振り返る中で、他校の生徒を招いてイベントを実施することの難しさや日程調整の課題が明らかになった。そのため、3年次には本プロジェクトを継続するのではなく、メンバーは二つのチームに分かれ、それぞれ別のテーマによる新たな探究活動に取り組むこととなった。

本活動は、地域の高校生同士の交流を生徒主体で実現しようとする試みであり、実際にイベントを企画・運営する経験を通して、生徒たちは人を集めることの難しさや地域で活動する際の現実的な課題を実感することができた。また、生徒主体の地域交流活動を実現するためには、主体性を尊重しつつも、学校間連携や支援体制をどのように設計するかが重要であることを学ぶ機会となった。

本活動は、生徒主体の地域交流活動の可能性と同時に、学校間連携を進める際の制度的課題を実感的に学ぶ機会となった。

【実践例9 舞鶴市の食材を活用したおにぎりの提案に関する探究】

本プロジェクトは、舞鶴市の食材を活用したおにぎりを提案することを目的として実施された探究活動である。本活動は地域未来学Ⅰの中で唯一の個人探究として取り組まれたものであり、生徒個人の関心からテーマを設定し、自ら計画を立てて活動を進めた点に特徴がある。

研究の背景として、生徒は「舞鶴市の魅力を発信する食べ物を考えたい」という思いを持っていた。おにぎりは持ち運びしやすく、日本の食文化として広く親しまれている食べ物であり、具材を工夫することでさまざまな栄養を取り入れることができる。そこで、生徒は舞鶴の食材を活用したおにぎりを提案することで、地域の魅力を発信できるのではないかと考え、本テーマを設定した。

まず、生徒は舞鶴市の特産品や地域の食材について調べ、どのような具材がおにぎりに合うのかを考えた。その中で舞鶴茶に着目し、地域の食材を活用した新しいおにぎりの具材の可能性を探ることにした。舞鶴茶は舞鶴地域で生産されているお茶であり、地域の特色を表す食材の一つである。そこで、舞鶴茶を活用したおにぎりの具材の試作を行うことにした。

試作では二種類の具材を考案した。一つ目は「ポン酢+舞鶴茶」であり、ポン酢の酸味と舞鶴茶の渋みを組み合わせたものである。もう一つは「舞鶴茶+塩+梅干し」であり、舞鶴茶の風味に塩味と梅干しの酸味を加えることで、味のバランスを工夫したものである。

試作したおにぎりについては、味の特徴や課題について振り返りを行った。「ポン酢+舞鶴茶」のおにぎりは、ポン酢の酸味と舞鶴茶の渋みがうまく合わさり、独特の風味が生まれたと感じられた。一方で、茶葉の食感が強く残りすぎてしまい、食べる際に少し気になるという課題があっ

た。「舞鶴茶+塩+梅干し」のおにぎりについては、舞鶴茶の渋みと塩味、梅干しの酸味が合わさり、味としては面白い組み合わせとなった。しかし、具材の混ざり方にばらつきがあり、おにぎりの部分によって味の強さが変わってしまうという課題も見られた

これらの試作を通して、生徒は具材の味だけでなく、食感や混ざり方などが食べやすさに大きく影響することに気付いた。また、地域の食材を活用する際には、その特徴を生かしながらも食べやすさとのバランスを考えることが重要であることを学んだ。

さらに今後の改善案として、おにぎりの形や見た目の工夫も考えた。例えば、三角形だけでなく丸型のおにぎりにすることや、色味を加えるためにゆかりを使用すること、チーズや梅干しなどのトッピングを加えること、海苔を巻くことなどが提案された。

これらの工夫によって、見た目の魅力を高めるとともに、味のバリエーションを広げることができると考えた。

本プロジェクトを通して、生徒は舞鶴の食材について調べ、実際に試作を行うことで地域の食材の特徴を理解するとともに、食を通じた地域の魅力発信について考えることができた。また、個人探究として取り組んだことで、自分の興味や関心をもとに主体的にテーマを設定し、試作と振り返りを繰り返しながら探究を進める経験を得ることができた。

本活動は規模としては小さな試作の段階にとどまったが、地域の食材を活用した商品や料理を考えるとという視点から、地域の魅力を発信する方法について主体的に考える学びの機会となった。

X 高校魅力化アンケート結果の分析結果

【1回目と2回の比較】

	1回目	2回目	1回目との差
【社会性に関わる行動】	27.6%	41.1%	+13.5pt
【探究性に関わる学習活動】	53.1%	61.8%	+8.7pt
【社会性に関わるウェルビーイング】	50.3%	56.5%	+6.2pt
【社会性に関わる自己認識】	53.8%	59.8%	+6.0pt
【主体性に関わる学習活動】	43.9%	49.6%	+5.7pt
【社会性に関わる学習活動】	34.1%	39.8%	+5.7pt
【社会性に関わる学習環境】	62.9%	68.3%	+5.4pt

	1回目	2回目	1回目との差
18歳選挙権を取得したら、選挙に行くと思う	67.0%	80.3%	+13.3pt
日本の将来は明るいと思う	41.0%	53.9%	+12.9pt
活動・学習のまとめを発表する	55.9%	67.7%	+11.8pt
将来、自分のいま住んでいる地域で働きたいと思う	41.4%	51.2%	+9.8pt
生徒同士で活動・学習の振り返りを行う	51.3%	60.6%	+9.3pt
地域の課題の解決方法について考える	33.0%	41.3%	+8.3pt
学校外のいろいろな人に話を聞きに行く	26.4%	34.6%	+8.2pt
将来の国や地域の担い手として政策決定に関わりたい	38.3%	46.5%	+8.2pt
将来、見知らぬ土地でチャレンジしてみたい	69.3%	76.4%	+7.1pt
地域の文化や暮らしの価値を未来に伝えたい	48.7%	54.7%	+6.0pt
地域社会の魅力や課題をテーマにフィールドワーク等で調べる	47.9%	53.5%	+5.6pt
私は、自分自身に満足している	52.1%	57.5%	+5.4pt

	1回目	2回目	1回目との差
【主体性に関わる行動】	64.2%	59.1%	-5.1pt

	1回目	2回目	1回目との差
授業で分からないことについて、自分から質問したり、分かる人に聞きにいったりした	73.2%	64.2%	-9.0pt

1回目調査（2025年6月）と2回目調査（3年2025年11月、1・2年2026年2月）を比較すると、「社会性に関わる行動」や「探究性に関わる学習活動」の上昇が見られた。特に、「18歳選挙権を取得したら選挙に行くと思う」「日本の将来は明るいと思う」「将来の国や地域の担い手として政策決定に関わりたい」などの上昇から、社会参画意識や地域への関心が高まっていることがうかがえる。また、「活動・学習のまとめを発表する」「生徒同士で活動・学習の振り返りを行う」などの上昇から、探究活動の学習プロセスが定着しつつあることが読み取れる。一方で、「授

業で分からないことについて、自分から質問したり、分かる人に聞きにいったりした」が低下しており、教科学習における主体的な学習行動には課題が残る。

【2024年度との比較】

	2024	2025	昨年との差
社会性に関わる行動	35.2%	41.1%	5.9pt
探究性に関わる学習活動	56.3%	61.8%	5.5pt

	2024	2025	昨年との差
将来、見知らぬ土地でチャレンジしてみたい	64.6%	76.4%	11.8pt
18歳選挙権を取得したら、選挙に行くと思う	72.1%	80.3%	8.2pt
自分が何かに挑戦しようと思ったとき、周りは手を差し伸べてくれる	80.3%	87.4%	7.1pt
活動・学習のまとめを発表する	61.1%	67.7%	6.6pt
日本の将来は明るいと思う	47.6%	53.9%	6.3pt
相手の意見を丁寧に聞くことができる	77.7%	83.9%	6.2pt
グループで協力しながら学習や調べものを行う	76.9%	82.3%	5.4pt
地域の人や課題など、興味を持ったことに対してすぐに橋渡ししてくれる大人がいる	74.2%	79.5%	5.3pt

2024年と2025年の比較では、「社会性に関わる行動」および「探究性に関わる学習活動」が上昇しており、本校の教育活動が生徒の社会性や探究的な学習行動の向上に寄与していることがうかがえる。

個別項目では、「将来、見知らぬ土地でチャレンジしてみたい」「18歳選挙権を取得したら、選挙に行くと思う」「日本の将来は明るいと思う」などが上昇しており、挑戦志向や社会への関心、将来に対する前向きな認識が高まっている。また、「活動・学習のまとめを発表する」「相手の意見を丁寧に聞くことができる」「グループで協力しながら学習や調べものを行う」などの上昇から、発表・対話・協働を重視した学習文化が形成されつつあると考えられる。

【全国平均との比較】

	本校	全国平均	差
【社会性に関わる行動】	41.1%	35.4%	5.7pt

	本校	全国平均	差
日本の将来は明るいと思う	53.9%	45.6%	8.3pt
社会参加・地域行動に関する項目	32.3%	25.9%	6.4pt
地域の人や課題などにじかに触れる機会がある	66.5%	61.1%	5.4pt

全国平均との比較では、「日本の将来は明るいと思う」「社会参加・地域行動に関する項目」「地域の人や課題などにじかに触れる機会がある」「社会性に関わる行動」などで全国平均を上回る結果が見られた。これらの結果から、本校の生徒は全国と比べて、地域社会や社会課題に対する関心や関わり意識が高い傾向にあると考えられる。特に、地域の人々や課題と直接関わる経験に関する項目で全国平均を上回っている点は、本校が進めてきた地域連携型の探究活動やフィールドワークの成果を示している。地域との接点を持たせる教育は、本校の強みとして位置付けられる。

本校 50%以下の項目

	本校	全国平均	差
いま住んでいる地域の行事に参加した	34.9%	36.3%	-1.4pt
地域社会などでボランティア活動に参加した	35.4%	25.9%	+9.5pt
学校外のいろいろな人に話を聞きに行く	36.7%	33.1%	+3.6pt
日本や世界の課題の解決方法について考える	44.5%	49.6%	-5.1pt
地域の課題の解決方法について考える	45.4%	49.1%	-3.7pt
将来の国や地域の担い手として政策決定に関わりたい	45.4%	45.2%	+0.2pt
自分が関われば社会を変えられるかもしれない	47.6%	53.4%	-5.8pt
日本の将来は明るいと思う	47.6%	45.6%	+2.0pt
複雑な問題を順序立てて考えることが得意	49.8%	50.4%	-0.6pt

50%以下の項目を整理すると、地域や社会との接点は一定程度確保されている一方で、その経験が課題解決に向けた思考や社会参画の当事者意識にまで十分結び付いていない状況が見られる。具体的には、「地域社会などでボランティア活動に参加した」「学校外のいろいろな人に話を聞きに行く」は全国平均を上回っているが、「地域の課題の解決方法について考える」「日本や世界の課題の解決方法について考える」「自分が関われば社会を変えられるかもしれない」は全国平均を下回っている。また、「複雑な問題を順序立てて考えることが得意」も50%を下回っており、課題解決に必要な思考の整理力や構造化の力にも課題が見られる。

【まとめ】

本校の高校魅力化アンケート結果を総合的に見ると、本校の教育活動は、生徒の社会性、探究性、協働性の向上に一定の成果を上げていると考えられる。特に、1回目調査と2回目調査の比較、ならびに2024年と2025年の比較のいずれにおいても、「社会性に関わる行動」や「探究性に関わる学習活動」の上昇が見られたことから、本校が進めてきた地域連携型の探究活動や外部との対話を重視した学習活動が、生徒の意識や行動に継続的な変化をもたらしていることがうかがえる。

個別項目においても、「18歳選挙権を取得したら選挙に行くと思う」「日本の将来は明るいと思う」「将来、自分のいま住んでいる地域で働きたいと思う」「将来の国や地域の担い手として政策決定に関わりたい」などの上昇が見られ、生徒の社会参画意識や地域への関心、将来に対する前向きな認識が高まっていることが確認できた。また、「活動・学習のまとめを発表する」「生徒同士で活動・学習の振り返りを行う」「学校外のいろいろな人に話を聞きに行く」などの上昇からは、発表、対話、振り返り、フィールドワークといった探究活動の基本的な学習プロセスが、生徒の学習経験として定着しつつあることが示されている。

さらに、全国平均との比較においても、「日本の将来は明るいと思う」「社会参加・地域行動に関する項目」「地域の人や課題などにじかに触れる機会がある」「社会性に関わる行動」などで全国平均を上回っており、本校の生徒は全国と比べて、地域社会や社会課題に対する関心や関わりの意識が高い傾向にあることが明らかとなった。これは、本校が進めてきた地域と連携した探究活動やフィールドワーク等の学習活動の成果が一定程度表れているものと考えられる。

一方で、課題も明確である。50%以下の項目を見ると、「地域の課題の解決方法について考える」「日本や世界の課題の解決方法について考える」「自分が関われば社会を変えられるかもしれない」などは全国平均を下回っており、地域や社会との接点そのものは確保されているものの、その経験が課題解決に向けた思考や社会を変える主体としての意識、自己の当事者性の形成にまで十分結び付いていない状況がうかがえる。また、「複雑な問題を順序立てて考えることが得意」も50%を下回っており、課題解決に必要な思考の整理力や構造化の力にも課題が見られる。

加えて、1回目調査と2回目調査の比較では、「授業で分からないことについて、自分から質問したり、分かる人に聞きにいったりした」が低下し、大項目でも「主体性に関わる行動」が低下していることから、探究活動や地域連携の場面では成果が見られる一方で、教科学習における個人としての主体的な学習行動にはなお課題が残っていると整理できる。

以上のことから、本校は、地域や社会とつながる学びを通して、生徒の社会性や探究性、協働性を高めている点に強みがある一方、その学びを課題解決に向けた深い思考や、教科学習も含めた主体的な学び、社会を担う当事者意識にまで高めていくことが今後の課題であると総括できる。

【今後の対策】

次年度は、本校の強みである地域連携型の探究活動や外部との対話的な学びを継続・発展させながら、それらを課題解決に向けた思考、教科学習における主体性、社会参画の当事者意識の育成へとより確実につなげていく必要がある。

そのため、まず、地域連携活動やボランティア活動、フィールドワーク、外部ヒアリング等の実施後において、単なる感想共有にとどまらず、「どのような課題があったのか」「なぜその課題が生じているのか」「自分たちに何ができるのか」といった視点で振り返りを行い、生徒が活動経験を課題発見や課題解決の思考へと結び付けられるようにする。活動を経験で終わらせず、意味づけと言語化を通して学びに転換する指導を一層重視する。

次に、探究活動と教科学習との接続を強化する。探究の中で培われつつある「問いを立てる」「対話する」「調べる」「まとめて発表する」といった学習プロセスを、教科授業の中にも意図的に位置付けることで、生徒が授業内でも自ら考え、質問し、他者と協働しながら学ぶ姿勢を育てていく必要がある。探究の成果が特定の活動場面だけにとどまらず、日常の学習全体に広がるよう、教科横断的な指導の充実を図ることが求められる。

また、課題解決に必要な思考力の育成に向けて、情報の整理、比較、分類、原因分析、解決策の検討などを重視した学習活動を充実させる。特に、複雑な課題を順序立てて考える力に課題が見られることから、課題の背景や要因を整理し、自分の考えを構造的にまとめる学習過程を、探究活動・教科学習の双方において意図的に取り入れていく必要がある。

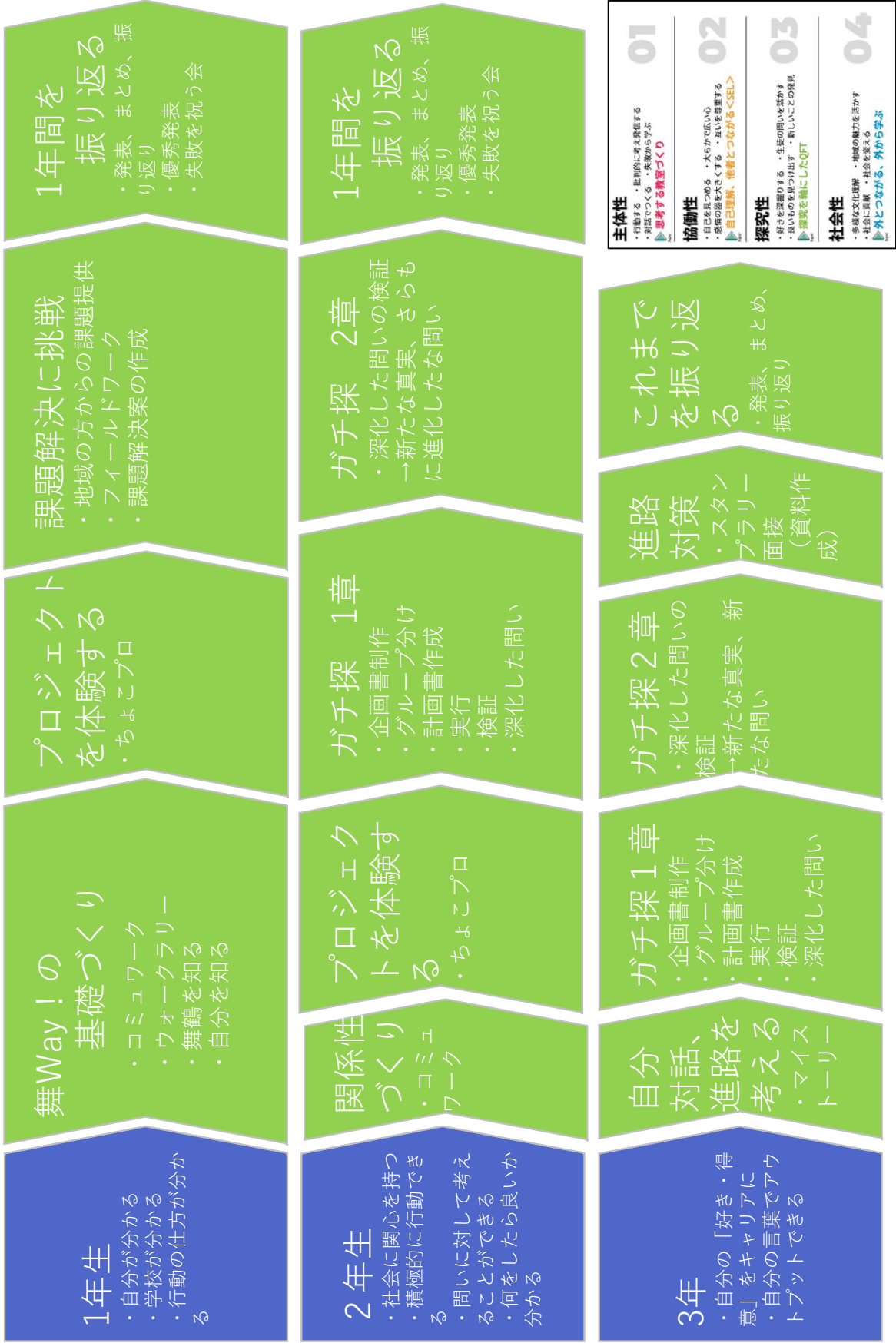
さらに、生徒が地域や社会の担い手としての意識を高められるよう、地域で活動する大人や関係機関との対話の機会をより充実させるとともに、自らの学びや進路と地域社会とのつながりを考える場を設定することが重要である。地域課題に触れるだけでなく、その課題に対して自分がどう関わることができるのかを考えさせることで、生徒の社会参画意識や自己の当事者性の形成を促していく。

以上を踏まえ、次年度は、地域や社会との接点を持たせる教育から一歩進め、その経験を深い思考と主体的行動につなげる教育へと発展させることを重点とし、生徒が自ら問いを立て、考え、行動し、社会の中で役割を果たそうとする学習者へと成長していくことを目指す。

IX 資料

2025年度「舞Way!」年間計画表

		1年生 総合(水曜日⑤⑥)		2年生 総合(水曜日⑤⑥)		3年生 総合(水曜日⑤⑥)	
月	日	5限	6限	5限	6限	5限	6限
4	9	始業式					
	16	オリエンテーション ②チームビルディング		オリエンテーション(調べ学習と探究の違い)		オリエンテーション (探究×キャリア)	マイストーリー (2年振り返り、これからの自分)
	23	関係性作り(校外)		チームビルディング チョコプロ導入		TAP	
	26	関係性作り(校内)		チョコプロ課題設定		大学生・地域の人(講義) 自分のマイストーリーについて	
	30	関係性作り(校外)		フィードバック再編集(GW実施)		ふりかえり、進路考える マイテーマ設定(グループ)(計画書作成)	
5	7	校外学習の振り返り・作成		フィードバック2 (改善実施5/7～5/14)		マイテーマ設定2 (早くできた生徒は探究開始)	
	14短縮	自分プレゼンオリ、ロールモデル(たたきをつくる)、 自分グラフ		発表準備1		ガチ探究1	
	21	ストーリーシート作成続き ※担任出来具合をチェック		発表・振り返り		ガチ探究2 (1,2どこかでアクションを入れる)	
	28	ストーリーシートを深めあう(ワールドカフェ) ※時間余れば次へ、または、シートできていなかったら少しここで作る		オリエンテーション テーマ設定企画書 ロールモデル		ブチ発表(意見交換)FB	
6	4	体育祭練習					
	11	自分プレゼン②シート作成		企画書作成		ガチ探究3	
	18	自分プレゼン発表		企画書シェアグループニング		ガチ探究4	
	25	地域の価値観に触れる プロジェクト概要		計画書作り		ガチ探究6(アクション有)	
7	2	期末考査					
	8	地域の方の価値観に触れる。 (プロジェクトとは?)(校外学習)		計画書作り 問い1個め		最終アクション・考察	
	9	ちょこプロ導入課題設定(大学生・地域)		フィールドワーク (宿題フィールドワークまとめ) 問い1の答え		今までの探究をまとめる(面接対策)	
8	27	始業式					
9	3	ちょこプロ発表準備1		ガチ探究1(宿題共有・新たな問い) 問い2個め		スタンブラリー面接	
	10	ちょこプロ発表準備2	ちょこプロ発表	ガチ探究2(問い検証・考察)		資料作成	
	17	ちょこプロ発表	振り返り	資料作成		資料作成	
	24	文化祭準備					
10	1	オリエンテーション(プロジェクト)		中間発表練習		卒論発表練習	
	8	中間発表・卒論発表(見学)		中間発表		卒論発表	
	15	中間考査					
	22	大学見学(大学生壁打ち)		振り返り		振り返り・データ作成保存	
	29	フィールドワーク事前学習 課題設定、準備	立候補者 討論会	ガチ探究3 (FB・新たな問い)	立候補者 討論会	自分が身につけた力学びとは探究 とは?	立候補者 討論会
11	5	フィールドワーク事前学習 課題設定、準備	生徒会役員選挙	ガチ探究4	生徒会役員選挙	卒論(3年まとめ)	生徒会役員選挙
	8(OS)	中間報告会・卒論発表会(代表)					
	12	フィールドワーク		ガチ探究5			
	19	振り返り 問いを深める		ガチ探究6			
12	26	フィールドワーク②準備		ガチ探究7			
	9	①～④フィールドワーク②		ゼミ発表・交流(大学生)			
	10	振り返り 検討(検証)・考察 資料準備					
1	7	検証(検討)・考察・資料制作				〇〇力作成	
	14	資料制作				〇〇力作成	
	21	最終報告会					
	28	報告会振り返り、保存データ作成、1年間振り返り					
2	4	優秀発表、失敗を祝う会					
	11	祝日(建国記念日)					
	18	予備日(HR)					
	25	HR		学年末考査			



2025年度 総合的な探究の時間「舞Way!」中間報告会&卒業探究発表会
教室・発表者・テーマ一覧

テーマ・タイトル	人数	テーマ・タイトル	人数
舞鶴の魅力を込めた帽子作り	8	舞鶴版ITO	5
BINGO大会	6	フードロス減らすために…	4
じいちゃんばあちゃんのリフレッシュの場を作りたい!	2	球技大会を開催	7
舞鶴茶の新しい魅力を発信する商品開発	2	歌を通して地域の人と繋がろうプロジェクト	2
作曲をしてみる	1	柔道整復師とは	2
スイーツで人の心を掴みたい!口～女子高生3人が結成したガールズスイーツ倶楽部～	3	悪臭のペットボトル	2
文化祭準備	4	クレープをうまくつくってみた	2
貝殻は小さいな	2	日常の中の人間観察	2
津波の危険	2	舞鶴の抹茶を使ったチャッククッキーを1日限定で販売しよう!	1
伊佐津川運動公園に遊具を設置	2	花	1
瀬崎を綺麗にゴミをリメイク	2	舞鶴の移住支援について	1
健康にいいリップを販売してみた♪♪	2	俺らのブタ野郎	2
#クリスマスマーケット参戦してみた。	3	舞鶴市の暮らしを豊かにするために	1
万願寺あまとうで商品開発	2	食品ロスについて	1
福祉について	1	動物を学校に呼びたい	1
どうすれば髪を傷めずにおしゃれな髪型を楽しめるか	1	舞鶴での就職や会社について	1
栄養士になるまで	1	地方都市における店舗過多と経済効率性	1
海ごみアートイベント開催	1	メンズで人気な髪型	1
音楽の効果	1	トランプを使ってゲームを作る	1
看護と好きなものによる影響	1	お金を稼ぐ方法	4
子供との信頼関係	1	救急車の無駄な出勤回数を減らすにはどうすればいいのか	2
ナース服の色による影響	1	舞鶴市にパティンセンターを作るにはどうすればよいか	2
看護師と結婚する職業が多いのは?	1	美術館の良さについて	1
救急の現場で安心を与える看護とは?	1	舞鶴の特産物を使ったスイーツ作り	4
竹麺	3	図書館にもっと人が入るには	4
舞鶴わらしべ長者チャレンジ	2	なぜプログラマーは強いのか	1
ゲーム大会	4	落ち着ける部屋のデザインとは?	1
川	3	街の魅力を伝えるため、クイズゲームを作り、実行する。	1
dress by the sea ～舞鶴の海でウェディングフォト～	2	看護×未来	1
スポーツ筋トレ地域	3	安心できる保健室づくり	1
睡眠の質の向上	3	医療にロボットを導入すると??	1
動物の魅力を伝える	1	看護における心理テストとは?	1
日星革命への挑戦	6	本人の意思か、家族の意思か	2
ファンタジーVS理論	1	医療現場で音楽が使われる効果	3
災害と看護	1	看護師の労働環境について	2
海外と日本の看護	1	空を見たらなぜ癒されるのか	2
サッカーと看護の共通点またいかけられることはあるのか	1	戦場の看護	1
病院でのアニマルセラピー	1	未来の看護	1
戦争・歴史から読み取れる看護	3	看護師が笑顔で接することについて	1
シベリア抑留者が使用していた病院について	2	看護師が美容業界に行く理由	1
水分補給の大切さ	3	病院は真っ青にできる?	1
人間の発達と音楽の関係性	2		
園児は医療に関してどれだけ理解して、どのように思っているのか	4		
サッカーは看護にどう生かされるか	1		
MBTI別の適した看護ケアの傾向	1		
看護とDX	1		
看護×私の未来	1		

2025年度 総合的な探究の時間「舞Way!」最終報告会
発表者・テーマ一覧(2年生)

テーマ・タイトル	人数
舞鶴の魅力を込めた帽子作り	7
球技大会を開催	6
舞鶴茶を使ったおにぎりづくり	1
フードロスを減らすために…	4
舞鶴茶の新しい魅力を発信する商品開発	2
竹麺	3
舞鶴わらしべ長者チャレンジ	2
お金を稼ぐ方法	4
美術館の良さについて	1
舞鶴市にバッティングセンターを作るにはどうすればよいか	2
スポーツ筋トレ地域	3
睡眠の質の向上	2
動物の魅力を伝える	1
図書館にもっと人が入るには	4
舞鶴の特産物を使ったスイーツ作り	3
子どもの求める病院	4
臓器移植における考え方の違い	2
勉強において集中できる環境を知る。	3
シベリア抑留者が使用していた病院について	3
舞鶴版ITO	5
じいちゃんばあちゃんのリフレッシュの場を作りたい!	2
BINGO大会	6
歌を通して地域の人と繋がるプロジェクト	2
トランプを使ってゲームを作る	1
ゲーム大会	4
救急車の無駄な出動回数を減らすにはどうすればいいのか	2
川	3
dress by the sea ～舞鶴の海でウェディングフォト～	1
ナメック星人摩訶不思議	1
日星革命への挑戦	5
タクシー運転手とAI	1
落ち着ける部屋のデザインとは?	1
筋トレ前にも食べれるスイーツ作り	2
街の魅力を伝えるため、クイズゲームを作り、実行する。	1
患者さんが笑顔になる看護援助とは	2
人がリラックスできる、過ごしやすい環境づくりとは。	2
看護師不足について	2
水分補給の大切さ	3
戦争で出来ることが限られてくる中で、ナイチンゲール精神を受け継いで看護ができたのか。	3

**2025年度 総合的な探究の時間「舞Way!」最終報告会
発表者・テーマ一覧(1年生)**

テーマ・タイトル	人数
音楽があることで世界でなりたっていることは	8
推し変するのはなぜか	6
筋肉力をつける方法	2
ゲームを作るには	2
人間も熊と同じくらい蓄えたら冬眠できるのだろうか	1
「ICU」の看護師が最後まで寄り添い助ける	8
ゲーム作りには何が必要か	6
勉強	2
犬はどの組み合わせが一番いいのか	2
ジャーナリング	1
将来、財布もPayPayも口座も空っぽにならない方法	8
仮面ライダーギーツの素晴らしさとは	6
イタリア文化のピザはなぜアメリカで人気なのか	2
日本人とアメリカ人とのガタイの違いとその違いをつけるトレーニングの秘訣とは?	2
バスケのシュート飛距離を伸ばすための効果的な筋トレとは	8
舞鶴のスポーツ人口を増やすためにはどうしたらいいのか	6
アスリートメンタルコーチングが選手に与える影響	2
ウェディングプランナーになるためには	2
良い睡眠をとるためには/睡眠の質を上げる方法	8
核について	6
小麦粉と米粉の違い	2
食べ物の匂い	2
1,2組で一番多いラブタイプは?	1
話し合いの日本と海外の違い	8
身のまわりの物をプロダクトデザインする	6
お茶の成分で薬は作れるのか	2
アニメやメディアの影響による価値変動と経済効果	2
鉄道の最も優れた材料、車両の形状とは?	1
なぜパイナップルを食べると舌がピリピリするのか	8
なぜ人は嫌なことに対して逃げたがるのか	6
りんごが美味しいのはなんで	2
流行る曲の共通点とは	2
赤ちゃんの時の環境や経験は将来の性格や能力にどのように影響するのか	1
いじめについて	8
人気があるアニメキャラの特徴	6
なぜ寿司は美味しいのか	2
なぜ夢を持つ事は大切なのか	2
犬の考えること	1

2025年度 総合的な探究の時間「舞Way!」最終報告会
発表者・テーマ一覧(1年生)

テーマ・タイトル	人数
人気の少ないボランティアを人気にするためにはどうすればいいか	1
消防士になるために	1
チアリーディングで今できること	2
なぜ授業中は眠たくなりやすいのか	1
動物は夢を見るのか	1
猫について	1
理学療法士について	1
好きなドラマーを見つけよう	1
必要とされる人とは何か	1
言葉が植物に与える影響	1
図書館司書になるためには	1
なぜ、舞鶴の人々は公共交通機関を使わず車を使う人が多いのか？	1
もったいないバナナスコーン	1
薬局にアナログが根強く残るわけ	1
グッズ作り	2
いじめについて	4
季節のお菓子について	3
人はなぜ恋をするのか	4
別の毛でもフェルトはできるのか	1
なぜ野球部は坊主にするのか	6
ハリウッドの渋い俳優ランキング	1
音楽が人間の心理に与える影響	1
家畜者を増加させるには	1
メイクと多様性	1
幼少期の「好き」は将来どんな能力を育てるのか	1
食文化から体型の違いを読み解く	1
子どもの悩みの実態とその寄り添い方	1
世界の飢餓問題を解決する方法	1
犬も夢を見るのか	1
なぜ子どもを虐待してしまうのか	1
どうして周りの人の笑いや涙につられて自分も同じ感情になってしまうのか。	1
偉人はなぜすごい努力ができたのか	1
好きな匂いと気分の関係	1
なぜ他の人と比べてしまうのか	1
なぜオーラがあると感じる人とそうでない人がいるのか。	1
流星群があるのはなぜか	1
なぜ人は睡眠をとるのか	1
なぜ自撮り文化が発達したのか	1